機動戦士ガンダム外伝

歴史の狭間に～不運の名将～　二巻

一巻

序
１　幻想の中へ
２　子悪魔と黒い竜巻
３　再会
４　遭遇
５　月
６　クリア・サテライト
７　月面
８　人として
９　地球降下作戦前
１０　女神
１１　来襲
１２　作戦開始
１３　富良野攻略
１４　ブラック参陣
１５　札幌戦線

二巻

１６　艦隊司令代行ライ・クラウン
１７　法廷の暗殺者
１８　密談
１９　宇宙へ
２０　コロニーの落ちる日
２１　戦の間に
２２　父との再会
２３　束の間の道楽。蹂躙戦
２４　その心は徒然に
２５　メールシュトローム作戦
２６　最終決戦前
２７　最終決戦

艦隊司令代行ライ・クラウン

　宇宙に残るブラック・ストーム艦隊は、戦術運用の円滑のために、艦隊司令代行は、旗艦如月の副艦長、ライ・クラウン中尉が努めている。本来将軍クラスのやる仕事であるし、現在三番艦ムラカミ少佐のほうが階級が上であるが、しかし、ライの采配・知略は佐官に劣るものではないし、旗艦が旗艦であり続けることはじゅうようである。それに、滄海は漣とは違い、しばしばエゥーゴの指令で別行動をとるためにムラカミが司令代行では支障が生じるのだ。

　「各員、艦の修理急げ！見張りは怠るな！宇宙は当然だが、特に地表に気をつけろ！」
　現在ブラック・ストーム艦隊は月面に近く航行しているためである。エゥーゴからの補給を待っているのだ。ＣＰＧからも補給は可能だが、緊急事態ではないので、正規のルートで補給を受けたほうがＣＰＧにとっては得である。
　「クラウン艦長代理、紅茶をお持ちしました。」
　持って来たのは、まだ十代の少女である。おそらく父母が殺されたのか、何らかの理由でエゥーゴに参加したのであろう。しかし、戦争とは古今こういった若者を巻き込む悲劇であり続けるのか。
　「ありがとう、ミーナ二等兵。君のような麗しい女性が淹れてくれると、紅茶の風味も一層引き立ちます。漣の艦長代理と滄海の艦長は？」
　「ご到着なさいました。」
　「そうですか。時間があれば、お美しいあなたとご一緒にティータイムにしようと思いますが残念です。」
　「ありがとうございます。」
　若干はにかんで答える。やはり、美男子である彼にそういわれるとまんざら悪い気もしないのだ。
　「では、作戦室に参りますので失礼。索敵手、異常があれば逐一伝えよ！」
　「はっ！」

　「サテライト中尉、計画に狂いがでましたね。補給艦がまだ到着しません。さらに敵接近。逃げるが上策かとも思いましたが、そうもいかないようです。」
　「何かありました～？」
　「はい。如月のエンジンが不調で最大速力の７０％しか出ません。」
　先日の戦いでの損諸部分を修理した箇所に、問題があるようなのだ。なにぶん先日の戦闘では、艦隊司令ブラック・スター不在のまま兵力５対６、すなわち戦力比２５対３６で戦い勝利したものの、四番艦天宮が中破し工廠送りとなり、如月、滄海にしてもそれなりに損害を受けている。そのさい如月の修理は如月で修理したために、漣のメカニックほどには完璧ではなかったらしい。また、漣の損害は甲板に不発弾一発命中という軽微であった。
　「そうですか～。向こうは巡洋艦。こちらは～、不調の戦艦では逃げれませんね～。」
ただでさえ戦艦と巡洋艦では速力に差があるのだ。
　「情報は？」
　なんといっても漣は高性能索敵機器をとデータベースを搭載しているのだ。
　「敵は巡洋艦１隻と輸送艦２隻です～。ＭＳ満載ですね～。最大で２８機でしょうね～。」
　「こちらは艦艇３、ＭＳ１６ですか。いささか不利ですね。やはり艦艇を繰り出して、

敵艦の撃破後降伏を求めましょうか？」
「クラウン殿、しかし損害を考えると・・・。滄海は先日乗員を入れ替えたばかりです。」艦長のムラカミは同じであるが、艦内の８０％の人員はエゥーゴの別艦隊に配属され、新人が再配属されたのだ。戦闘経験者は新造艦の各部門の教育係として引き抜き、何とか戦力アップを狙っているのだろう。一種、滄海はそのためにブラックストームに配備された艦であるといえる。
「サテライト中尉は何か？」
「艦隊特攻よりは～ＭＳ戦で兵力を削るのがよろしいかと～。」
「戦力比の問題は？」
「データを観たんですが～、ア・バオア・クーでの戦いが参考になるかと～。漣の予備の装甲板をデブリに見せつつ～、先制攻撃を仕掛けるのが妥当かと～。盾にもなりますしね～。」
これはかつてカスミ中尉が採用した戦術の応用である。当時は、甲板を馬防柵に見立て射撃の組織戦を展開させたのだ。
「なるほど。しかし、それだけでは手ぬるいですね。伏兵か何か・・・。」
「それなら～、機雷は如何です～？」
「いえ、最近機雷に頼りすぎましたからね、読まれる可能性が高いでしょう。」
そう、ここ一週間で三回も採用した作戦なのだ。いい加減通用しなくなるだろう。
「では～地雷は如何です～？」
「地雷？」
「センサーには多少問題があるので～、滄海には地雷のセンサーを担当してもらい～、爆発させれば～びっくりさせられません？」
「どういった地雷です？」
「強烈な閃光を放射するものと～、散弾をばらまくものと～爆風を数十メートル上げるものです～。」
「また、イシガヤさんの無駄遣いですか・・・。開発費を時々そういうものに使ってしまうのが問題です。」
それは帳簿の問題である。財務諸表に機雷や地雷の開発費など計上するわけにもいかないのだ。ＣＰＧでは、表向きそういったタイプの兵装は開発しないとしているのだ。連邦に睨まれないようにするためである。
「大変ですね～。それで如何ですか～？」
「滄海に異存は？」
「いえ。」
「ではそれを採用します。」

「ＭＳ隊の指揮はナカサト中尉に任せます。」
「りょうか～い！」
「俺は？」
「フルーレ中尉は当艦のＭＳ２機を指揮して敵艦上部へ牽制。地雷付近へ下降させてください。また、機雷も少量撒きますので注意。ロウゾ中尉はナカサト中尉に従ってください。」
「イエッサー！」
「了解しました。」
「艦隊は雁行の斜陣。前から漣、如月、滄海です。それと、西へ１０キロに協力的な連邦軍施設が、北西へ１２キロの小都市には、さる政治家の乗るシャトルが停泊中です。間

違っても流れ弾を当てないように！撃つ際は威力が逓減するビームに限る。各員健闘せよ！」
　「政治家ねぇ。そんなもんまで気にするライも大変よね。ドメス、滄海の砲隊２機は任せるよ。ドレンはさっさと先行。ちゃ～んとおびき寄せてよ！ホーク少尉、漣のＭＳ４を指揮して！他の４機は私に続け！」
　「ミキ中尉、機雷散布します。地雷は滄海のＰＭＳが設置完了。艦隊は少し後退する予定です。装甲板放出します。」
　「オッケー！クリアちゃんも頑張ってね。各員装甲板に取り付け！若干散開してデブリに見せるよ。速度や方向はバラバラにね！クリア艦長代理！」
　「わかっています。今送るデータにあわせよ。」
　クリアは、用意した速度や方向の表を送信する。敵との遭遇予定を狂わせることなく、バラバラの運動を出来るように計算したものだ。
　「よっしゃ！俺様は突撃だ！」

　「こちらドレン、敵艦は機雷に突入するみたいだぜ。」
　機雷は少ないとはいえ、敵に気付かれるように撒いている。しかし、それにかかわらす敵艦は進行方向を変えていない。
　「読まれましたか。ナカサト中尉、デブリからホーク隊は引き上げさせなさい。ドレン中尉も後退。艦隊も微速後退。続いて１８０度回頭用意。」
　「了解。」
　ロングワイヤーで通信する。すなわち退却に見せかけて、ナカサト隊で敵後部から艦隊を討つのだ。そのためには、デブリの伏兵は退却したとみせねばならない。故に半分を退却させるのだ。それによって、こちらが多少手の込んだ策を使ったのは、兵力不足と見せる効果もある。
　「ドメス、あんたは今から伏兵になる準備をしなさい。」
　「何故ですか？」
　「間抜けに見えるでしょ。」
　「間抜け・・・了解しました。」
　「くっ！」
　「どうしました！？」
　「ちょっとミサイルがね。ドメス、ワイヤー切るよ。各員、敵はこの偽装デブリにミサイルを撃っているが、一切動かないでよ！動けばみんな死ぬからね！」
　そう、敵は機雷の対処に奔走して、このデブリにＭＳを割く余裕がないのだ。あるいは、絨毯爆撃の真似事で伏兵の確認をしているのである。
　「しかしナカサト中尉！」
　「怖いならモニター切って、祈ってなさい！合図は通信回線だけ開いてれば判るから。」
　「中尉は怖く無いのですか？」
　「怖いに決まってるじゃない！だけど動けばみんな死んじゃうのよ。」
　「ぎぁぁ！」
　ミキ指揮下の滄海のＭＳ一機がミサイルで撃墜される。デブリに紛れて目視は出来ないが、隊長機とは通信が繋がっているためにミキのみがその事実を知れる。だが、他の部下には一切教えることはない。動揺したパイロットにＭＳを動かせないためだ。非情に感じられるが、それが部隊を指揮する者の務めである。一を殺しても十を助けるのが名将であるのだ。
　「もうちょっと・・・。」

敵もさるもの、敵艦は機雷原を突破しＭＳの発進を開始する。
「・・・如月に向かったやつが２２機・・・。・・・・・・良し、敵巡洋艦に攻撃するよ！」
敵は計２６機のようである。護衛に４機がいて手強いが、目的は巡洋艦のエンジンか艦橋だけである。各自バズーカ弾３発ほどぶち込んで後退するのである。一撃離脱。乱戦に持ち込む必要はない。それに、護衛ＭＳは、護衛をしようとするために、完全に組織立った反撃はしづらい物なのだ。特に、普通は近接戦闘が弱いのである。
「１、２、３！直撃！」
ミキが巡洋艦のエンジンに　１発、艦橋後部に１発直撃をあたえる。部下もあわせれば４発の直撃である。大破こそしなかったが、航行がせいぜいというまでに追いやる。
「補給艦は気にしないでよ！各員撤退開始！」
「ドレン中尉、動揺中の敵に強行攻撃を。全艦全力砲撃開始。対空砲火厚くせよ！」
しかし、突然オペレーターの声が上がる。
「停戦要請です！」
「何！どこからだ！」
「月のイタガキ殿です。」
「全軍退却！我が艦が殿を務める！」
「クラウン中尉、なぜ停戦するのです！こちらが有利です。」
「昵懇の政治家からの要請です。」
「ですが・・・。」
「クリア中尉、戦争は政治の延長です。政治を優先させねばなりません。もし戦えば賊軍にされるかもしれず、 CPGに圧力がかけられるかも知れません。」
「わかりました。確かに補給がなければ戦えませんね。」
理由はわからないが、信頼できるイタガキの要請である。おそらくは　CPG に何らかの問題が発生したのだろう。ブラックが地球に降りてから数日が経過しているのだ。まずは港に降りて情報を集めねばならない。ともかくも　CPG に政治圧力がかけられるのは避けなければならない。 CPGからの補給線なくして戦闘を繰り返すのは無謀である。

「オニワ副会長、何があったのです？」
「どうやら、会長が北海道を席巻したようです。」
「と、いうことは法廷に備えてですか。」
「そうですな。今、事を荒立てるのは良くはないでしょう。」
「そうですね。根回しの方は？」
「まずまずですな。一般人には関心がないようですが、政治家には反響があったのですよ。」
「両軍はともかく、旧ジオン派とそれ以外の政治家にですか？」
「さよう。旧ジオン派が不支持なようですな。」
「まさか・・・」
「ジオン共和国がティターンズに傘下に入るようです。」
「まさかっ！」
「脛巾の調べは正確ですよ。」
「わかりました。如月と漣は武装の封印を徹底しましょう。滄海はＡＥへ。指揮はサテライト中尉に任せます。」
「よろしい。クラウン殿は支持していない政治家にあたり、できる限り干渉をしないように頼みなさい。」
「しばらく戦場に居たのが不安ですが、わかりました。脛巾のメリッサと直属秘書だっ

たドロシーの２名は？」
「その秘書２名は準備済みです。警備に脛巾のケイスもつけましょう。」

「君が CPGの代表かね。ずいぶん若いな。」
「はい。若輩ですが、会長の参謀長を勤めております。」
「参謀？大仰な役職じゃないか。側近ということかね？」
「はい。会長の趣味でして。普段は会長の側であらゆる計画の補助を行っております。」
「なるほど。ならば話が早い。一企業が正規軍を倒すほどに軍事力を持つのは困るのだよ。しかも、よりにもよってカワグチ君を破ったというじゃないか。」
「それが何か？」
「カワグチ君と言えば、なかなか名将の誉れ高い人材だ。まさか互角以下の戦力に負けたということはなかろう？」
当然な質問である。ティターンズでも若くして士官になったカワグチである。その盛名を知っているものは知っているのだ。
「いいえ。戦力的には、若干こちらが不利でした。ですが、カワグチ司令もさるものですが、各界に顔が利くのはこちらです。あまたの支援者の協力によって、決戦兵数の少ない中、勝利することが出来たのです。」
「ほんとうかね？あのカワグチだぞ？」
「本当です。戦術的にも遅れはとりませんでした。こちらの司令伊達黒宗は、数百年前の日本で勇名を馳せた将軍の子孫だそうでして、その血を受けついたのでしょう。」
「極東アジアの小国の将軍であろう？それほどのものかな。」
「１７世紀前半でしたか？ローマ教皇に謁見したその極東アジアの小国の使節、ハセクラ使節団をご存知ですか？」
「そういえば、聞いたことがある。」
「幸いです。その使節を送ったイダテ・マサムネが先祖だそうです。」
「そうか。よくはわからんが、すばらしい先祖の血を引くということか。」
「はい。それにかれは、子供のころから兵学を学んできたそうで、兵学に関してだけはカワグチ殿に劣ることはありません。他の事はこちらの人材がやりましたので。」
「ＣＰＧはそれほど強力なのかね？」
「いえ。兵力に関してはたいしたことはありません。連邦軍の三個小隊規模でしかないでしょう。ですが、人材には自信があります。」
「本当かね？」
「お疑いでしたら、私が代わりにシミュレーションでの戦闘をご覧に入れましょうか？小規模艦隊でしたら、私でも他の艦長に引けはとらないつもりです。ともかく、当社は彼や私のような戦闘のエキスパートを保有しておりますが、それは経営戦略の向上のためでして、連邦軍に仇なそうというような、他意があるわけではないのです。」
「ふむ。」
「おそらく、数時間後には戦闘記録映像が到着するはずですので、それをこちらまでお送りします。お疑いが解けることでしょう。当社としては、せめて政治干渉をしないでいただきたいのです。」
「そうはいってもな。」
「お願いいたします。彼も宇宙に戻し、地球のほうはスズキ中将に保護していただけるようになっております。連邦軍には誠意を見せていましょう？」
「宇宙に・・・。」
ライがさらっと言ったことは重要である。ＣＰＧ社の戦力はやはりそれなりに月にある

ことは確実なのだ。それをカワグチを破った将軍が指揮した場合、下手をすれば大規模なテロなどが起こらないとも限らない。暴動が起これば、次の選挙に当選する見込みは当然減る。
「なかなかやるな。良かろう、貴君に免じて、私が干渉するのはよそう。しかしわかっているな？」
「はい。細かいことは明日、当社のその筋の者をお伺いさせます。」
「よかろう。では、私はこれで失礼させていただく。君らのせいで忙しくなったからな。」
「申し訳ありません。では、私もこれで・・・。」
待たせてあった車に戻ると、そくグラナダ支部に連絡をする。政治献金と何らかの政治協力をするためである。ざっと見積もらせて、明日にはその交渉をさせなければならない。
「ドロシー次はあそこだ。車を出せ。」

「これはクラウン殿、お久しぶりですな。」
「おひさしぶりです。このたびは当社に不都合があるそうで。」
「さよう。私はジオン系でしたが、そろそろティターンズに協力しようと思いましてな。公国の方はみなそういうものですしな。そちらの女性は？」
「秘書のメリッサです。ご挨拶を。」
「始めてお目にかかります。メリッサ・アースですわ。」
「なかなか美人だ。私の横にお座りなさい。」
「はい。」
「それで、今回の件ですが、こちらもティターンズに他意があったわけではないのです。何分急に戦闘を仕掛けられたので、撃退。さらに再度の攻撃をするという情報がありましたので先手を打って叩いただけなのです。」
「なるほど勇ましい。ですが、そちらの会長がその現場にいたそうではないですか。それなのにあんな戦闘があっては、何かと不都合でしょう。何もかも秘書がやったことですとでもいえばよろしいのに。わざわざご本人が法廷にですそうで。責任をなすりつけるには秘書ですよ秘書。ところでこの娘の秘所には興味ありますな。」
「あんっ！」
「当社としては、せめて政治干渉はしないでいただきたいのです。私は忙しいのでこれで失礼させていただきますが、細かいことは秘書のメリッサをここに残し任せます。」
「いいでしょう。善処しましょう。」
とはいえ、やはり気分のいいことではない。しかし、三十六計にも美人計というものが存在する。常套手段ではあるのだ。しかも、その後のことはメリッサの独断である。命令は一切していないのだ、当然断る権利もある。どちらにせよ、見合いといえばそういえなくもない。

「ドロシー、グラナダの有力者はほぼ回りましたが・・・。」
「はい。それが何か？」
「そうですね・・・・・・表面は完了しましたが、やはり味方が最大の敵である可能性が捨て切れません。ケイス、ＣＰＧのＰＭＳ・ＭＭＳ開発工場へ。」
「判りました。」

「まずいですね・・・。」
「なにか？」
「見張っているやつらがいますよ。ぱっと見でも３人。」

「気付かれましたか？」
「おそらく。」
「ドロシーあなたはこの車で先に帰りなさい。脛巾でない女性を危険な目に合わせるわけにはいきません。」
「解りました。」
「ケイスは私の護衛を。」
「了解。」
そういってライは工場内に入る。
「工場長はいますか？」
「これはクラウン様。何か？」
「急ぎのようです。当社の人型作業機械の生産をしばらくストップしなさい。理由は何とでもなります。」
「何故？」
「月でティターンズの何らかのアクションがあるはずです。外に見張りがいました。おそらく・・・理由をこじつけてこちらを叩き潰すつもりでしょう。」
「そうなんですか？」
「はい。そうですね・・・しばらく社員旅行でもしてきなさい。ここは従業員１００未満ですから、全員有給休暇を出しましょう。」
「それはうれしいんですが、大丈夫ですか？」
「そうですね・・・旅行はこちらで手配しても一千万円は超えてしまう出費ですし、生産できない分が予定外の損害になりますが、経営難に陥るほどではありません。どちらにせよ、今年は多少の損害を出しても潜在的経営力の養うこと、グループの威信上昇によって製品の信頼を上げることが目標になったのです。これから先、あなた方にとっては不安になる要素がいろいろと起こりますが、よもや退職などと言い出すのはよしてください。これは想定された事態で、むしろその不安要素が５年以内にグループにとっての利益に貢献するのですから。」
「不安要素が？」
「そうです。問題が起きるでしょうが、それに対処するすべは全て整っています。社員にそう伝えておきなさい。また、本社からさしあったって社員の給料数か月分に相当する金額が振り込まれますので動揺しない様にと。会計などについても、不正はないとは思いますが、今年一年は普段より厳重に監査するように。人員についてはこちらから派遣してもかまいません。よろしいですね？動揺しない限りこの社は安全です。しかし、あなた方が動揺すれば、そくこの工場を閉鎖、場合によってはリストラをすることになりかねません。」
「わかりました。」
これからのビジョンを教えると同時に少々の脅しを加えておく。実際、人間は次に事が起こることがわかればそれなりに覚悟が出来る。覚悟をさせればそれほどの動揺は起きないのだ。

「オニワ副会長、ただいま戻りました。」
「そうですか。こちらはグラナダの市長です。」
そういって初老の紳士を紹介される。まぁ、見たことはある顔だ。
「はじめまして。」
「はじめまして。こちらは？」
「紹介しましょう、会長の参謀を勤めるライ・クラウンです。若いですがなかなか頼り

になるのですよ。」
「ほう、それは。」
「いえ、まだまだ見習いの身です。」
まぁ、一通りの挨拶を終える。
「それでグラナダの件だが・・・。」
「ティターンズが近いうちにフォン・ブラウンを狙うのは、確かな筋からの情報です。しかし、いつかはわかりませんぞ。グラナダについても何かアクションがあるのは確実ですが、当社でもまだ掴めていませんのです。」
「そうですか・・・。」
市長がわざわざ一企業に足を運んできたのにもわけがある。なんといっても、ＣＰＧの情報力はその筋で有名なのだ。それに、グラナダといえばかつてジオン公国、キシリア少将旗下の主力部隊がおかれていた場所でもあり、そしてＣＰＧの諜報部の大半はキシリア少将旗下だった者たちなのだ。そういう点ではＡＥに勝る信用と信頼があるのである。もっとも、それと商売は別であるが。
「もしグラナダに攻め込まれたら・・・」
「そうですな。戦力はＡＥ任せですからな。当社の戦力といっても、常駐しているのはいささか旧式のＭＳ６機のみ。呼び戻せばサイド６のムサイ級春菜とＭＳ３機を用意できますが、春菜は現在リーア軍と協力体制にありますからな。」
「入港した軍艦は？」
「一応エゥーゴのものですしな。漣はともかく如月はまずいでしょう。」
「そうですか。」
「しかし、占領しようとしてもそうそう簡単にはいきません。戦闘用工作員１００人を用意しています。」
「１００人だけでは・・・」
「その人数は正規のものだけですし、少将閣下の子飼いの者ですよ。」
「なるほど。」
「ＡＥの動きはわかりませんが、ＣＰＧはＡＥの傘下ではありません。万が一のときはＡＥの意向にかかわらず、微力ながら助力いたしますのでご安心ください。それでライ、何か変わったことはあったのかね？」
「では、大まかなことを今報告します。」
すなわち、市長に聞かせて差しさわりのないことである。
「人型作業機械工場にティターンズの諜報員らしき者を発見しました。故に、工場の一時閉鎖、社員への旅行と有給休暇を決定してまいりました。他の雑貨・日用品工場や精密機械工場での異常は見つかりませんでした。各界の有力者ですが、私の受け持ちでは約２割の説得に成功したと思われます。また、他１割の方は揺れているようです。」
「ほう、２割も説得できましたか。工場閉鎖の処置も的確でしょう。しかし・・・」
問題は諜報員がいたことである。
「大丈夫なのですか？」
グラナダ市長の心配ももっともだ。
「ご安心を。諜報も防諜も万全です。しかし、騒がしくなるかもしれません。」
両者の諜報員が活発に動けば、闇に葬るべき事象も多数生まれるのだ。それを騒がしいと表現したのである。
「ところで副会長、ヤクザ連中の動きはいかがですか？」
「さぁ。そこまでは。しかし市長、この件に連中は関与しますまい。」
「何故？」

「かなり疲弊していますからな、ここらの連中は。二箇所は組長が代わったばかりですし、最大級の組織には制裁を加えたばかりです。なにぶん当社に過剰な資金請求をしつこく求めてきましてので、幹部連中五名を襲撃し脚部を複雑骨折させました。また、機密文書の奪取にも成功。潰そうと思えばいつでも潰せる口実を手に入れました。」
そして、こちらに大きな告訴される心配がないのが強みだ。イシガヤが黒脛巾を再編成してから、ゲリラなどへを除く暗殺は行っていないし、麻薬取引などは一切やっていないからだ。まぁ、不正アクセスや不法侵入、傷害などはあるがそれも大きいものではない。そして、戦争での活躍は、エゥーゴとしての行動でくくれる故に、必ずしも犯罪とはいえないのである。
「なんにせよ、もしものときはよろしくお願いしますよ。私は所用もありますので失礼させていただきます。」
そういって市長は帰途に着く。

「味方の損害はＭＳ４機大破。ＭＭＳ５機大破。ＰＭＳ２機大破。その他損害多数。思ったより損害は小さかったな。味方の半数以上は大破すると思ってた。さすがブラックだ。感謝する。」
「・・・ふむ。」
「礼をしたいが何かないか？」
「・・・いや。さしあたってない。」
ブラックとしては、自らの戦術を実行できただけで満足である。かつての戦争の中ではもっとも機動兵器を運用した戦いであった。総人数で言えば戦艦での戦いのほうが多いが、それと機動兵器での戦いとは別である。また、今までの戦いは制約が多く、思うようにならない部分も多かったが、今回は完全に大将としての指揮権が確立していたのである。戦略・戦術家としてこれほど有意義な戦はない。それに、礼といわれても、平均的な家庭が一生食うに困らない資産はある。
「そうか。そいじゃあ、何かあったら言ってくれ。できる限り協力する。それと・・・・・・俺はこれから各所へ申し開きに行かなきゃならないが、お前はいないほうが都合がいい。あぁ、当然戦功はお前のものだが、申し開きは得意じゃないだろ？俺はその件は得意だから任せてくれ。」
「ふむ。では宇宙に戻ろう。しかし、敵の反撃はないのか？」
「あぁ。まずない。近くで危険なのはカワグチだが、お前が倒したし、エン大佐は動く気力はあるまい。第一、ここいらの基地はスズキ中将旗下の連邦軍に明け渡す用意が完了した。すでに派遣軍は決まっている。」
「・・・。明け渡すとは？」
「まず、この度の戦闘は彼とタキ技術少将の支持を得て行っている。彼らはこの日本近辺において軍事ではスズキ中将が、技術ではタキ少将が統帥権を確立している。そして、俺は彼らと入魂の間である。だから、明け渡しても攻められる心配はまずない。また、せっかく攻め取ったとはいえ、それを維持する財力はないし、威信のなく、占領すれば連邦軍さえ敵に回さないとならない。アクシズが地球にいるならともかく今それは無謀だ。それに、スズキ中将とタキ少将なら、アクシズが地球圏を制圧した際にかなりの理解を示すはずだし、その布石は打ってある。」
「・・・なるほど。それでＣＰＧの利益とは？」
ブラックにはその点がわからない。戦略戦術ならともかくそういったことはわからないのである。

「金は損失だ。軽く見積もって３０００億。それだって基地の物資を略奪してこれだけの損失に抑えた。また、法廷に勝てば２０００億くらいなら回収できる。だが、今回の作戦を行ったことで当社の威信は急上昇。６割近く俺個人が所有しているが、一部の公開株の株価も三倍くらいに跳ね上がっている。警備用などのＭＭＳやＰＭＳの発注も増えてきている。それに、今実力を示したことで、ほかの企業にたいして無言の圧力を加えることにも成功した。また、庶民は断固とした態度を見せるものを好むしな。ついで、連邦に基地を明け渡し、恭順を示すことによって信頼も増す。ようは、無形の利益は計り知れないってことだ。」
「・・・ふむ。」
半ば中立者の姑息な策略にもおもえる。
「それとな。俺は攻めてくるというなら連邦だろうがアクシズだろうが相手にするぞ。相応に恩義はあるが、俺には俺の思惑がある。」
すなわち、中立ではあっても、決してただの中立とはいえないのだ。いわば推移によっては小なりとはいえ第三の勢力になる覚悟はあるのである。また、味方をすれば感謝されるのが当然。敵対しても文句を言われる立場にはないという開き直りなのである。
「そうか。積極的な中立というわけだな。しかし、そのための戦力としては少ない。」
「あぁ。それはな。だが今回の勝利がある以上、うかつに責めてくるやつはいないさ。だいたい、ＣＰＧじたいは連邦傘下だ。」
「個人的にはアクシズよりというわけか。」
「そうだ。問題が起これば俺個人の暴走で片付ける。それをできるだけの人材はいるしな。」
アクシズが勝てばイシガヤの一存で味方だといえるし、連邦が勝って、尻尾をつかまれても、会長個人が勝手にやったこととして処理するというのである。そのために、ＣＰＧの金を直接使ってアクシズへの支援を行ってはいないのだ。一応合法的な手段でイシガヤのもとへ資金が回り、その資金がアクシズやエゥーゴへの協力用資金となっている。うまく立ち回れば、イシガヤの死刑程度でことは済ますことができるのだ。
「・・・よくやる。では、宇宙が気になる先に行くぞ。」
「あぁ。ついでにカスミ君も連れて行っておいてくれ。」
「・・・ふむ。」

「留守の間ご苦労。資料を。」
「はい。」
ライが戦闘経過や作戦計画、敵位置関係図などの資料を渡す。なんといっても、司令官にこれらの資料を提出するのは副官の役目である。
「・・・ふむ。作戦計画に多少の問題が見受けられる。ほとんどが技術的問題であるが、戦略面で重大な欠陥がある。」
「どこでしょう。」
「敵補給、輸送艦の発見数のわりに、その撃破数がすくない。また、留守を任せてから二度目の大きな戦闘であるが、戦う必要性が見受けられない。」
「申し訳ありません。しかし敵戦闘艦を三隻撃破した意義はそれほどありませんか？」
「ふむ。ないではない。しかし、このときレーダーの捉えた補給艦隊を討つほうが有意義ではあるまいか？」
「しかし、全部撃破したとしても補給艦は三隻に過ぎませんが。」
「これを見よ。これらの補給艦隊の予測航路であるが、これを察するに積荷は艦艇修理用資材かＭＳ修理用資材が妥当である。艦速から考えて積荷が無いということはない。ま

た、各観測装置や友軍の観測データから照合し、この艦隊が有効に機能していることは明白である。対して、このとき討った戦闘艦隊は、比較的に指揮官の低能が予測される。三日前、十七日前の観測時にさして有効な行動をしていない。」
「はい。ですから討てるときに討ったのですが・・・。」
「・・・ふむ。では、いつでも討てる戦闘艦隊と、なかなか優秀な補給艦隊。両者を比較するにどちらが有効かな。」
「なるほど。確かに補給艦隊を討つべきであったかもしれません。ですが、この場合戦闘艦隊が友軍の脅威にはなりえませんか？」
「・・・ふむ。味方予測布陣と敵予測布陣であるが、我らが戦闘艦隊を見逃した場合友軍との接触確率は３８％である。敵予測航路から考えてパターンは１２通り。このいずれをとった場合にも、１０分間に戦闘に参戦できる、交換比を換算した兵力数の二乗における兵力比率であるが、単純計算をして友軍５に対し敵４である。また、１５分で３対２、２０分で２対１である。脅威になるにしても友軍の優勢は確実であろう。もっとも危険が予測されるのは、当艦隊が補給艦隊を攻撃に向かう際、後方を追尾してくるものである。この場合においてのみ、反転、決戦を行うのが妥当であろう。ただし、この判断を敵がした場合、この戦力比率での交戦は危険である。敵指揮官の有能が示されるからである。然るに、友軍艦隊に連絡し挟撃策に出るか、何らかの迎撃策を講じるか、退却の判断が必要となろう。」
「なるほど。コスト計算については？」
「・・・・・・ふむ。大まかな計算であるが、戦艦一隻をコスト１００とすれば、戦闘前の友軍は８９４。敵戦闘艦隊９７２。敵補給艦隊５６６。予測における、戦闘艦隊との交戦後は友軍５６１、敵７２０。複合的な友軍の損害は５３０。敵４１０。補給艦隊との戦闘後は友軍７９１、敵１３７。複合的友軍損害が２１０。敵１２０５である。コスト面からも補給艦隊撃破が有効である。補給艦隊１の損失は、多方面の戦闘艦隊に被害を及ぼす故にだ。」
ブラックの恐るべきは、ライが３０分かけて処理するデータをものの１分ほどで暗算をしてのける点だ。コンピューター程に正確ではないが、重大になりうる差は無い。しかも、計算だけでなく経験的予測も的確であるし、それを実行できる才覚も併せ持っている。欠点は、政治力という数値化しづらいもの計算は不得意であるところと、マーケティング能力であろうか。まぁ、その欠点も艦隊司令に必要な能力ではない。これらを言えば超人に思われるかもしれないが、失敗が少ない点のみが強力なだけであるといえる。それは武田信玄のようであり、織田信長のような時代を動かす構想力などは持っていないのだ。

法廷の暗殺者

「お久しぶりです、タキ少将閣下。」
「ん。」
「北海道よりティターンズを駆逐したこと、連邦本部ではどうなっていますか？」
「よくわからん。スズキ中将がとりなしてくれているようだ。だが、ティターンズを駆逐したことはよくやった。」
「はっ！光栄です。これも良き客将を得ていたからにほかなりませんが。」
「そうだ。その客将について詰問されるらしい。・・・もうすぐ法廷が始まる。後でな。」
「はっ。」

「ＣＰＧ会長タカノブ・イシガヤ、お前は反連邦軍エゥーゴの将校と協力し、ティターンズを撃破したと聞く。相違ないか？」
「相違ありません。」
臆面もなく答える。若干拍子抜けしたものも多い。イシガヤが平謝りに謝るとでも思ったのだろう。
「エゥーゴは連邦の敵である。その将校を客将として統帥権を与えたこと、これについてはどう思うのだ。それに、たかが企業が連邦軍に刃を向けたことについてもである。」
「はっ。それは正当防衛にほかなりません。まず、われわれは連邦軍の指示に従い技術開発を執り行っておりましたが、そこへ問答無用で駒を進めてきたのはティターンズであります。いかに連邦軍部隊とはいえ、技術開発を行う釧路支部においては機密も多く、仮に勝手に占領されればわが社だけでなく連邦の機密も多く流出する恐れがありました。また、当支部においては部外者の排除という任務も連邦より受けており、そのための自衛戦力を有するのは認められています。また、客将・伊達黒宗は私の友人であり、友人の危機に友人の援助を得ることは当然のことと思われます。」
一応、ブラック・スター大佐の本名は伊達黒宗となっている。遠縁の伊達家（伊達政宗の）本家に養子となり家督を譲ってもらったので、昨年名前を変更したのである。もちろん正式に役所での変更手続きも行っている。
「クロムネ・ダテ？ブラック・スターではないのかね？そして、そのブラック・スターはジオン独立戦争で連邦軍に対し弓を引いた。さらに大佐という高級将校ではないか。戦争犯罪人として手配してしかるべき人物ではないのか？」
「いえ。仮に彼がブラック・スターだとしても、戦争犯罪人というのは心外でしょう。そもそも、そのブラック・スターの罪状が明らかに不明です。確か、記録上では８８機のＭＳ、７隻艦艇撃墜としかないはずです。その程度で犯罪者といえますか？それならば、優秀な兵士は皆殺しにしてしかるべきです。」
「ブラック・スターについてよく知っているな。」
「当然です。それくらいのことは簡単に調べがつきます。それに、その程度ならともかく、私の目の前ににいるかたがたの中には狸が複数居られるようで。」
「・・・・・・。」
「また、伊達黒宗がエゥーゴにいるとしても、友人の危機に客将として参上することには何一つ不信はありません。むしろ、彼の義理堅さやイデオロギーだけで行動しているのではない正当さがあると思われます。」
「それとこれとは別であろう？」
「いえ。中にはエン大佐のように娘を見捨てる将校もいますし、目の前のかたがたにい

われる筋合いのことではありません。無論、潔白な方もいらっしゃいますけどね。」
「何が言いたい！」
「言っていいんですか？」
「・・・・・・。」
要するに、この法廷に出席する連邦軍関係者や司法関係者の中には、裏で犯罪行為を行っていたり、ティターンズやエゥーゴとつるんでいる連中も多いということである。当然、つるんでいる連中には金の流れが形成されていると見て間違いない。そして、イシガヤはその一部でも把握しており、暗に脅迫しているのである。
「・・・まぁ、その件については言い過ぎた。しかし、北海道で戦闘を繰り返した件についての釈明をせよ。」
「まず、最初に言うことがあります。我々はティターンズを排除しましたが、基地は連邦軍に返還を完了しました。連邦軍に対して他意はありません。では、戦闘経過についてお話いたします。
５・１５　08:05　ティターンズ、カワグチ司令率いる部隊が当社釧路支部襲撃を行うことを把握。08:09　防衛準備開始。民間人避難開始。10:14　防衛準備完了。10:20　民間人・社員の退避がほぼ完了。 11:00　ティターンズ、レーダーに捕捉。 11:19　戦闘開始。 12:08 ティターンズ空母襲撃。 12:39　ティターンズ撤退。交渉開始。 13:05　交渉決裂。
５・１６　06:22　ティターンズ、第二回釧路襲撃計画を察知。 08:30　対策会議開始。 10:00　伊達殿への協力要請。 10:45　兵力増強開始。
５・２０　伊達殿到着。
５・２１　00:05　エゥーゴを名乗る敵性ゲリラより富良野基地接収。 01:30 敵性ゲリラ逃亡。
５・２２　00:10　富良野戦開始。 00:11　富良野退却。 04:30　富良野攻略完了。 12:05 旭川ゲリラと接触交渉。
５・２３　06:30旭川入城。 07:30札幌攻略戦対策会議。 12:00各所への協力要請。 22:17 擬装用ミデア墜落。 00:00　伏せ場敷設開始。工作活動開始。
５・２４　07:30　札幌攻略作戦開始。09:21　ティターンズ先鋒と接触。交戦開始。10:01 先鋒撃破。 10:04　後衛と接触。 10:06　両軍膠着。 10:15　民間協力者内応。 10:20 ティターンズ撤退開始。 12:00　札幌入城。」
このようになっております。」
「富良野のゲリラについては？」
「当方は感知しておりません、。伊達殿の軍勢到着以前にゲリラが富良野攻略。到着時に多少の敵対行為が見られましたので、威嚇をしたところ敵は撤収の準備を開始。こちらでは拘束する準備が整っておらず、01:30不意をつかれ逃げられました。彼らはエン大佐に恨みを持っているようで、今回の作戦行動中、いくつかの行為が確認されましたが、幸いにして味方有利の状況になりました。また、５・２５、彼らの基地を発見。撃破した後、捕虜の収容をいたしました。ですが、ゲリラの人間は全員死亡、あるいは逃亡をしております。」
「証拠がないな。」
「当然です。ティターンズの正規軍でさえ撃破したゲリラ相手です。こちらはにわかに軍団編成を終えたばかりで、統帥権も確実ではなかったのですから。だいたい、ゲリラに負けたティターンズの将兵や基地内の民間人を開放しただけでも上出来です。もともと軍ではないのですから。」
たしかに、ゲリラに正規軍が負けたというのは最大級の不祥事である。それを考えれば一企業が捕虜を発見・解放したことは、賞賛に値する。

「どうですか？何か問題はあるでしょうか？」
「しかし、やはり連邦軍に刃を向けたというのがな。ゲリラとつるんでいないとも言い切れない。」
「ぐはぅ！」
議長が軽く手を上げた瞬間である。入り口付近から悲鳴が聞こえてきたのだ。それに、イシガヤの後方からもである。
「まさか法廷で私が暗殺されようとは思いもしませんでした。コードはフェン、ロレンスの二名。本名ファーストネームはチャン、ケネス。そして、それに命令していたのはティターンズ少尉ダニエル・エリスターですね。さらに黒幕はここにいらっしゃるどなたかでしょうけど。」
そういったイシガヤの側に彼の部下らしい人間が二つの死体と身柄を拘束された人物をつれてくる。ちなみに、イシガヤの後方にいたケネスを殺したのはイシガヤである。議長が手を上げたのが合図であり、暗殺者が動くと同時にクナイが一閃されたのである。イシガヤに向かう銃弾は議長の席を掠めて壁に突き刺さっている。
「実に怖かった。さて、今の不始末から考えて、ゲリラの件がもしかしたら連邦軍の内部事情でないとはいえませんね。チャンとケネスはどこかのゲリラの一員だと聞いています。」
「ふんっ！そのような人物は知らない。」
「そうでしょう。では、今ダニエル少尉が舌をかんで死んだのはどういうことですか？罪がないなら自殺することはないでしょうに。彼は失敗の責任を感じ、拷問を受けて白状しないように自殺したのでしょうが、白状しなければならないこととは何でしょうね。だいたい、法廷にこんな危険分子がいるとはどういうことですか！」
半ば呆然としている連中に向かってイシガヤがまくし立てる。
「よろしいですか？私たちは連邦軍に他意はありません。ですが、殺されるつもりもありません。北海道席巻はやらなければやられるので専守防衛をしたにほかなりません。そうしなければ釧路支部の連邦軍機密も守りきれませんから。私たちに非がありますか？私たちは釧路防衛を成し遂げました。先に手を出したのはティターンズです。そして今なお私は命の危険にさらされています。これでもまだ非があるというのですか！？」
騒然としている法廷にスズキ中将が幾人かの兵士を連れて入ってくる。
「銃声が聞こえました。何事です！？」
「暗殺されかねました。」
「何と！賊が進入していたとはいったい・・・。」
「スズキ中将、下がりたまえ。」
「しかし・・・イシガヤ殿の身の安全が保障されない法廷は、法廷といってよいのでしょうか？イシガヤ殿には異心はありません。どうかその点をご考慮ください。」
そういってスズキ中将はさがる。
「・・・・・よくわかった。君の正当防衛は明確である・・・。」
議長は苦々しくつぶやく。イシガヤは暗殺者を暗殺したのである。彼の雇った暗殺者もそう質が悪いということはなかったはずだ。が、しかしである。イシガヤがそれ以上の暗殺者を持っていることは確かであるし、イシガヤ自身が今それをやって見せた。ということは、今ここにいる議員がイシガヤに暗殺されない保証はない。ここでの敵対は、命の保証がないのだ。
「我々に他意がないと、わかっていただけて光栄です。それと、損害賠償ですが、せめて我らの死傷者家族に対する慰霊金は払っていただきたい。また、釧路支部修繕費は連邦の施設でもありますからそちら持ちでお願いします。」

　イシガヤも賠償金については多くを言わない。下手に欲張れば、完全に敵性分子とみなされうるからである。また、今しがたの殺人についてもいちゃもんをつけられよう。本来利益のための賠償金も欲しいところではあるが、さしあたって、連邦政府法廷での完全勝利は、宣伝効果につながりうる。
　「よかろう。」
　議長はそういい、多少の混乱を残して法廷は閉会される。

　「マジ死ぬかと思った。ハチスカ、魔眼の衆、よくやってくれた。もちろん我が手勢の白銀衆もな。」
イシガヤはそう黒脛巾の工作部隊に礼を言う。彼が危険を犯して法廷にこれたのも彼らの支えによるのだ。
　「しかし、なぜあそこまでひきつけたのです？少佐ならすぐに気づかれていたでしょうに。」
　「演出さ。法廷の終盤にたたみかけるためだ。それで我慢した。」
　「ですが・・・。」
　「今の俺はＣＰＧの会長だ。かつてのキシリア閣下旗下の工作部隊の隊長以上に政治的なアクションを必要とされる。そのための演出の一貫さ。ともかく、これで当分は安全だろう。白銀は引き続き警護を頼むが、魔眼はジオン残党への接触を図れ。好戦的なやつらには後一年もすればアクシズが来るだろうとな。緋の眼からアクシズの接近が近いと連絡が来た。それと、技術者で引き抜けるやつは引き抜いておけ。」
　「了解しました。」
　ハチスカ以下の魔眼は命令を受けるとすばやく消える。あまり集団べ目立つのはよろしくない。
　「こんなとこにいたのか。」
　「これはタキ少将閣下。」
　「法廷はどうだった？こっちは何とか大丈夫だったけど。」
　「申し訳ありません。法廷では完全勝利ですが、連中を少し脅迫しました。あとでおとりなしください。」
　「ん。スズキ中将からは賊侵入の件は聞いた。あれでは仕方ない。」
　「それもありますが・・・。」
　「まぁ、腹黒くないものは正当が誰かわかっていよう。それと、流石に小悪魔ということか。暗殺者を返り討ちにしたとは。」
　「昔取った杵柄です。見苦しいところをお見せしました。」
　「いいじゃないか。私の周りの賊もお前の部下が排除してくれるし。」
　「閣下には恩義がありますから。ところで、私はこれから釧路で事後処理の命令を行い後静岡に向かい、そこでエン大佐の娘を保護ないし開放して、宇宙へ戻るつもりです。」
　「わかった。それとオオウチの件だが、しばらく私のもとで軟禁しておこう。」
　「よろしくお願いします。」
　タキ少将も、一見昼行灯に見えるが、これでなかなかの策士である。政治力も申し分ない。ただの技術将校ではないのだ。

密談

「ミネルバ、お前は仙台を指揮してくれ。」
「・・・仙台ですか？」
「あぁ。釧路は軍事はスズキ中将に任せておく。ただ、監視は怠るな。釧路での開発はアキトに任せればいい。お前は仙台で地球の経済を見張ってくれ。」
「地球の経営本部は仙台に？」
「あぁ。上海とかニューヨーク、ロンドン辺りでも良かったが、土地が確保出来たし、やはり日本の方が好きだ。」
「しかし、資源立地を考えると・・・。」
「まぁなぁ。そうは思うけどよ、地球での販売のメインは日本とアジア諸国で７５％を占めるし、まぁ、生産拠点にするわけじゃないしなぁ。それに良港もある。釧路・関東・東海が生産や開発の拠点だが、東京だと地形的に不測の事態に対処しづらい。」
「それはそうですが・・・。」
「だいたい、ほかの国の主要都市は今は危険だ。今、比較的確実に安定しているのは日本のみだしな。それにミネルバ、お前たちには悪いが、我には目的の一つ、捨て置けぬものがある。それは大和の民、大和の民の繁栄だ。」
「・・・それは会長の勝手ですが、この時代に？」
「あぁ。むしろこの時代だからこそ民族の血と誇りを残したい。だからこそ、かつて室町時代後期の如く衰退する天皇陛下への援助もなるべく行いたい。」
「しかしそれと仙台への本拠設立との関連は？」
「かつて仙台の都市を作った始祖は伊達政宗公と聞く。今は無き仙台城には天皇陛下を迎えるための帝座の間もあったらしい。それはともかくとしても、釧路と繋げる空陸の良港もあれば、誘致してもらえるかつての自衛隊基地跡地もある。関東に睨みを利かせるのにも充分であるし、一年戦争で荒廃が目立つ東京よりは良い。また、社員の六割は日本人であり、他にも日系人が多く共通語も日本語と英語だ。また、仙台では釧路より冬がまだましだ。釧路は冬場の海上輸送がつらい。それに、意外に伊達家当主のブラックの顔がきく。」
「ですが・・・。」
「また、連邦に繋がるには、タキ少将やスズキ中将の本拠地に近く都合も良いし。」
「確かに月に関しては支障があるのはわかります。あまりにＡＥ傘下とみられますし、今だジオンの残党とみられることもあります。また、ルナリアンと企業方針があまり適していませんし。ですが、移すならやはり香港や上海、シンガポール、ハノイが無難では？」
「が、そこは確かに拠点としては適切だ。地球制圧にはな。反面、戦乱があれば巻き込まれやすい。だから危険といったんだ。釧路もそうだが仙台は侵略用軍事拠点としてはあまり適当ではない。」
「そうですが・・・。」
「それに、本部は情報のやりとりを中心にする。工場化や店舗化はせず、純然な司令部にするつもりだ。」
「・・・わかりました。何とかやってみます。」
イシガヤの意志変更は無理と判断したのだ。ただ、この時期にさらなる出費をするのはいささかつらいのではないだろうか。顔に出たのだろうイシガヤが付け加える。
「資金か？それはタキ少将やスズキ中将と相談してな、この方面の連邦軍への情報提供を条件に、無利子でかなりの額を借りれる。情報収集は当社の十八番だからな。」

確かにその通りである。その辺の方面軍に全く劣らない収集力があるのだ。
「それにしても、亡きキシリア閣下のおかげだ。閣下の諜報部員をかなり確保出来たし、閣下の資金も多少使わせて頂けた。・・・勝手にだが・・・・・・。まぁ、ミネバ閣下に還元はしたがな。こないだから作らせている北海道伊達郡の博物館にはキシリア閣下の遺品や、列伝その他の名誉ある歴史の展示場も確実にな。大恩ある方だ。」
「了解いたしました。」
「あぁ。正直オニワの爺の後はお前に任せたい。よろしく頼む。」
それはすなわち、ＣＰＧ本社、ＣＰ社社長代行であると同時にＣＰＧ副会長候補ということだ。可能性としては新規資源開発担当のトモアキ・オニワ、一歩遅れて直属参謀長ライ・クラウン、ヨーロッパ方面ＣＰエレクトロニクス社長カーライル・アークラインがいるが、やはり政略、知略、経営力、その他資質に加え、イシガヤの信任においても彼女、ＣＰＧ釧路支部長ミネルバ・バイブルが群を抜いている。
「じゃあ、俺は中将のとこ言ってから、静岡行って、そんで宇宙に戻るから、コ・ムサイとブースター、土産を用意するように言っといてくれ。」

ＣＰＧ東京支店、会議室内。ここでスズキとの密談が予定されているのだ。スズキのほうが一足早く到着しているようである。イシガヤの動向がいまいち読めない以上、早く来るのは賢明である。イシガヤも急ぎ入室する。多少の社交辞令の後、
「さて、スズキ中将閣下、現在連邦を如何お考えで？」
「・・・正義の政府です。それが何か？」
流石に用心深い。
「盗聴も録音もしてませんよ。部下に調べさせても結構です。」
ともかくも、本題に入る必要がある。まさか今更調べたりはしないだろうが、一応そう言う。今更というのは、イシガヤが着席する前にそれらを調べた形跡があり、イシガヤ入室の際も、三重のチェック装置を通ってきたのだ。また、妨害電波も流している様でもある。早く来たのはこのためだったのだろう。もちろんイシガヤのほうも防諜は万全である。たとえスズキ中将が盗聴器を仕掛けてあってもだ。
「私としては、別段連邦に義理は無いんです。残党狩りにあう際は旧ジオンを匿っていますし、他にもパイプはあります。」
「しかしながら、こちらは連邦軍の将軍なんですよ。極東日本での連邦組織は適切に運営されているでしょう？」
それは確かである。スズキ中将の力で、日本はもっとも治安のよい地域の一つであるのだ。すなわち、経済的な影響はないが、警察力への影響は充分である。また、日本での適切な駐屯政策の為に、それに対する住民の不満は、枕を高くして寝れるほどに少ない。一年戦争での復興支援も、不法滞在者や高級官僚などの貧富の差を作らず均衡するように行った為でもある。
「ですからお聴きしているんです。亡きレビル将軍ほどの方がいれば、現連邦も腐敗しなかったでしょうが。仮にいま反乱軍でも侵攻して来れば、連邦は支えきれないかも知れません。アジア、オセアニア、アメリカ以外に限ればですが。」
「だが、侵略者は討たなければならないだろう？」
そして、彼が迎撃する限り、日本が陥落する可能性はいたって少ない。彼を討つには、優れた指揮官が三倍以上の軍を引き連れて来て互角であろう。
「仮にですが、日本に攻めてこない場合は如何？」
「・・・。」
「スズキ中将に優る将軍は、目下少ないですな。ですが、中将は極東の将軍です。アジ

アは、或いは指揮下に入るかも知れませんが、他は難しい。また、遠征する資金の余裕はティターンズのせいで奪われていますからね。」
「しかし、他が立てば立たねばならないだろう。」
確かに、その場合は静観するわけにはいかない。
「立つと思いますか？」
「いや。」
北アメリカ大陸の司令達は自らの利益を追求する人間であるし、南米はティターンズが核を使うのを黙認した連中である。アジアの諸軍は、立ちたくとも金銭的余裕が無い。立ちうるのはオセアニアだが・・・、果たして勝算が少なげな戦いを仕掛けるかどうか。そして現司令は、無能ではないが、軍指揮より内政などの方に力をもつ人間である。
「それで、その場合は静観・・・というより、敗残兵を吸収し、資金と物資を集めておくことが重要だと思いますが。」
「私がいれば容易く日本陥落はしない。さらに、兵力増強により発言力を増し、連邦再建の軍の主導を握れると。しかし、アクシズにそこまでの力量があるかな？が、どちらが勝とうとＣＰＧの価値は上がる。」
ＣＰＧは、連邦からみれば収益の差こそあれアナハイムと同格の企業であるし、地球に本部を移すＣＰＧの方がより親しく思われるはずだ。それでいてまた、アクシズとは裏でつがっているのである。アクシズが勝てば御用商人になるのも無理ではない。
「そうです。私としては、連邦が勝っても、アクシズが勝ってもかまいませんが、社員を食わせていかなければならんのです。ティターンズが勝つのと、エゥーゴが圧勝するのが困るんですよ。」
「良かろう。どちらにしても遠征の資金はない。が、万が一にもアクシズが侵攻した場合は？」
「日本にはそうそう手を出させません。アクシズへの衣食供給ラインの３５％を掌握しているのは我が社です。これを断てばアクシズの備蓄は瞬く間に無くなります。また、当社はかつての義理で利益皆無の供給をしていますから、他から買えば、およそ三倍から四倍の金がかかります。しかしアクシズに金は無い。そして、資源確保の為に強行攻撃をかければ、第二次大戦の日本の二の舞です。」
「兵糧攻めか。が、君の社は日本を見捨てはしまいな？」
「目下、新本社を仙台に移す計画が進行中ですし、私の腹心も心の本拠も邸宅も日本にあります。そこの防衛はあなたに任せたばかりですしね。」
「釧路の情報機関と情報やバイブル君達か。確かに人質としての価値は充分だ。しかし子悪魔の仇名がある君だ。」
ミネルバ一人とっても、最低数十億の価値はある。イシガヤに身の代金を要求すれば一千億でも応じるに違いない。それが無理でも、これを拉致し籠絡して自分の味方に出来れば、その価値は計り知れないものになるだろう。何せ、内政・外交・資金のやりくりを彼女に任せ、軍を指揮することに専念出来るからだ。まさに得がたい人材である。ただ、イシガヤが冷酷な暗殺者ジオンの子悪魔の異名をもっていたことに、人質を見捨てる不安はある。
「だからこそですよ。腹心格の部下を簡単に切り捨てて、首をすげ替えることをしていれば、配下が私を殺しにきますよ。工作部隊だからこそ信頼が重要なのです。」
「そういえば、私もだが、君もムラサメ研究所を野放しにしているようだが。」
「サイコガンダムですか？恐るるに足りません。独自に開発した兵器の機動力で圧倒出来ますし、そうですね、ガンダムクラスを一機手に入れれば、強化人間より強力なパイロットがいますし。」

「だれか？」
「ダテ殿です。カワグチを討った将で、かつパイロットとしても申し分ありません。」
「そうが、記録映像と作戦要項をみたが、彼なら量産機二個小隊でも撃破出来そうだな。戦いたくない奴だ。」
スズキ中将とブラックが互角の兵力で戦えば、ブラックが勝ちそうではあるが、確実では到底無い。おそらくブラックの勝率が三割、敗率が一割、後は両軍膠着するか、消耗して引き分けるに違いない。将軍としては優劣付けがたい戦いになるだろうが、ブラック旗下にイシガヤがいれば、強力な暗殺者がいる。スズキも格闘などに多少自信はあるが、しかし、暗殺は防げても行動が圧倒的に制限されるぶん不利である。
「では、この件は内々に。よろしくお願いします。」
「ふむ。また会おう。」

「タキ少将、ご挨拶に参りました。」
「ん。こっちに席を用意させる。どうした？」
「はい。また道楽で宇宙に行くつもりでして、その前に挨拶に。」
「そうか。」
「閣下、最近はいかがですか？」
「ん〜、ぼちぼちだな。あんまいい開発プランは無い。ムラサメのサイコガンダムＭＫ―２プランも見たが、でかいしなぁ。それ以外はあんま技術的発展無い。」
「そうですか。またこれからも色々とご教授ください。とりあえず、頼まれたキュベレイのファンネル関係と Ｚタイプの変形機構は、詳細にこちらの資料にまとめました。お受け取りください。」
「ん。助かる。では気をつけて行け。」
「はっ。」
これ以上の会話は無いが十分である。これよりタキは多少の MSを増産するつもりである。アクシズの動きはまだわからないが、スズキ中将の状況もまた要注意なのだ。現状の２０機でも戦力価値は十分だが、まだ余力がある以上、後２０機ほど用意しておいたほうがいいだろう。動かす人材は多くないが、同じ連邦として動くならスズキ中将旗下の兵を動かせるわけであるし、またスズキ中将の兵を使えなくても、イシガヤ旗下のジオン残党兵を運用できる。イシガヤとはそれだけ古い知り合いなのだ。

宇宙へ

「ハチスカ、その方ハロルドに変わりグラナダの黒臑巾を指揮せよ。ハロルドは、地球の乱に備え宰相に付してきた故な。」
宰相とはミネルバのことである。イシガヤの趣味でそう呼んでいるが、確かに宰相といえる影響がある。
「ありがたき幸せ。」
「私はまた漣を指揮する。」
「しかし御屋形様、御屋形様の身に何かあれば・・・。」
「いやはや、何処にいようと死ぬときは死ぬ。それにな、ティターンズの暗殺者は恐るるに足らんが、なまじ会長の揚げ足を取られるとまずい故に、しばらく身をくらまして置くがよいと思ったのだ。」
「はっ。」
それは工作員のイシガヤではなく、経営者としてのイシガヤの判断であるのだ。
「ハチスカ、その方当年７つの子息がいたな。」
「はっ。」
「地球はコダチのとこに預け、ネヤの護衛兼遊び仲間にしてはくれぬか？近辺に子供はそう多くなくてな。」
「クスノキ様の？」
ハチスカは幼少のネヤにも様をつける。副会長の嫡男の妻の連れ子で今は養子ではないが、場合によってはオニワ家、或いはイシガヤの養子にならないとも限らない少女だからである。また知性は高く、またイシガヤの手勢でも才知に優れたコダチを付けて、軍略、政略、経営術、詩歌芸術を教えているとも聞く。すなわち、このご学友にされれば、相応の教育を受けた上で、ＣＰＧが健在であれば次代の、表舞台で出世出来る可能性があるのだ。
「はっ、ありがたく。明日にも発たせます。」
「それはあせらずともよい。しかし、グラナダの固めは明日にも強固にしてくれ。」
「はっ！しかし少佐、その変な口調はいかがかと。」
「そうか。俺は好きだがしゃあない。今後気をつける。じゃぁな。」
そういい残し密議室を退出したところで、部下が用件を述べる。
「フリージャーナリストからの取材依頼だと？」
ティターンズとの仲が緊張関係にある今である。
「はっ、何でも特務課をと・・・。」
「爺は？」
「伝えましたが。」
下手に断れば勘ぐられると言いたいのだろう。
「ティターンズの手の者か？」
「カイ・シデンと名乗りましたが。」
取次の社員にわかることではない。
「・・・ふむ。・・・やむない、私が概要説明しよう。特務課のカリン・ナーダを呼べ。課長は出張でいない。」
「はい。」
連絡後すぐにあらわれる。流石に脛巾は違うのだ。
「会長、お呼びで？」

「急な特務への取材だ。カイ・シデンというからには、バックはカラバかエゥーゴと思われるが、何処であれな。私の言いつけは守っていような？」
「はい。万事問題ありません。」
「直接確かめよう。」
「悪いが各机の引き出しを開けるぞ。」
「はい。」
そういって、マスターキーを使い手当たり次第に開けて中を確かめる。
「『宇宙農業レポート』？・・・ふむ。まだ先のことだが・・・。むっ、菓子にエロ本！？」
「ミナカミの机です。」
「よい。むしろこの方がよい。あちらにはプラモか。ここの活動記録は？」
「あちらに。」
「ふむ。まぁ見た感じ問題なく記入されているな。出張や交通費が多いが、これはどうしている？」
「はい。他の月面都市小売店への監査や地球への商品監査などと。」
「符合は？」
「各支部へ連動させていますし、船は自社専用便を使うことにしてあります。」
「図表を。」
「はい。」
「まぁよかろう。これならバレることは少ない。所詮特務課は脛巾のアウトプットの一つでしかないから、機密は口頭やメモ類位だしな。メモやディスクは必ず焼却だろうな？」
「はい。そこに焼却機が。」
「よろしい。しかしカリン、君の机だけに隠し引き出しがあった。中の物はただの私的な写真だったが、今後隠し引き出しを作るは禁止だ。今回はやむない、そのままにする。シデンという人物に聞かれたら、正直に答えろ。」
まさか気づかれまいと思っていたが、甘かったのだ。イシガヤとて子悪魔の二つ名をもった工作員だったのである。
「今日撤去すれば・・・」
「諜者がいないとは限らん。脛巾の優れた連中がいない今、下手なことはするな。」
防諜能力が低下しているのだ。企業秘密なら奪われても致命的ではないが、脛巾との関わりを知られたら破滅しかない。

「シデン殿、こちらが特務課のカリンです。」
「ほぉ、お若いですな。」
「若い方が案内に良いかと。」
「いやいや、それは・・・。」
「私がですよ。妻はいますが、私とてまだ２０代の男。むさい男を横に置くより、才知と美貌に溢れた娘の方がいいのです。」
「確かにそりゃそうだ。だが、あんたはやり手には見えないな。」
「恐妻家でして。側に置いて気分がいい以上なことはしませんよ。」
「ほんとに会長かい？そうは見えないが・・・。」
「はい。業務はほぼオニワ副会長に委任していまして。そうそう、撮影はお断りです悪しからず。暗殺されると嫌ですからね。」
「気のせいか血なまぐさいニオイがするがな。」
「そうでしょう。これでも一代の経営者と言われますからな。常にシェアを奪い、他社をつぶそうと戦略を練っています。それこそホワイトベースの艦長より血なまぐさいニオ

イがするでしょう。路頭に迷わせて自殺なされた方も相当いましょうから。」
「違いない。」
「さて、特務課というのは言わば社内の情報管理と人での足りない部署に人材を派遣することを業務としていまして。」
「情報管理だ。その情報管理ってのはどうやってるんだ？」
「どうとは？」
「裏でどこかと繋がっているんじゃないかい？」
「そうですね。あなたほどには裏社会とも繋がっているかもしてませんシデン殿。その辺どこの会社でもそこそこ繋がっていますしね。」
流石にやり手のジャーナリストである。が、イシガヤは平然と裏社会と繋がっていることを話す。そんな分かりきったことまで隠す必要はないのだ。
「あんたなかなかやるな。分かりきったこととはいえそれを暴露するやつは少ない。」
「でしょう。この程度のことを知らないあなたではないし、こんな程度のことを公表するあなたでもない。あえて言えば、特務課は清廉な組織ですよ。決して汚れてはいない。ですが、交友費など表に出せない計上はありますが、それ自身も別段の不正はない。知っていましょうが、私はスズキ中将やタキ少将と親密ですが、彼らほどの情報収集力と防諜技術を持ってはいます。ですが、彼らと親密な私が・・・。」
「友を見ればその人の本質が分かるというがな。確かにあんたの周りには変わり者が多いが、薄汚れた連中はいない。相当腹黒いやつはいるがな。」
「そういうことです。うちを調べてもさしたる面白みはないですよ。偽りは真実になり、偽りは真実となる世の中です。命は光陰に移されてしばらくもとどめがたし。あなたが真実を知りたがるのは自由ですが、真実が人々のためになるかといえば果たして断言できるか。私たちはあなたと違い十を殺して百を助けなければならない経営者です。いかにそれを憂うとも、十のために百を殺すことは天道に背きます。そして、私が実質的な経営者となってからは一切天道に背くことはしていません。」
「天道。古代中国の言葉か。しかし戦争に足を入れるのは本当に天道に背いていないのかい？あんたの影で泣いている人間も生まれるだろ？」
「私には理想があります。ですから、別段利益のために戦争をしているわけじゃない。が、軍資金は必要でしょう？私の理想はアナハイムのような小さいものではないのです。中世的なイメージの聖君が治世を行なう人類の平和なのですから。それはジオンの思想でも連邦の腐った民主主義でもない。高潔な貴族主義に近い。それは天道に背いているとは言えないでしょう。あなたならこの立場に立てば、理想を求めながら現実の浮きし事を行なうこの憂いが理解できるでしょう。その憂いを憂い、その衝動からジャーナリストをはじめたのでしょうから。」
「憂いを憂うか・・・。」
「ですから、特務課は憂いを理想に変換するための一部です。ですから、例えば・・・会計上の不正や、ただ薄汚れた贈収賄などはやっていませんし、あらゆる情報源からこの社のためだけに必要なものを分析して伝達しているにすぎません。多少の、人的資源に対する先行投資は行ないますが。」
イシガヤの理論ではう薄汚れた贈収賄と、それとは別の贈収賄があるらしい。それを人的資源に対する先行投資と表現したのだ。が、イシガヤの性格とニュアンスからしてもそれそのものは『不正』というほどのももではないのだろう。例えば、有能で清廉な政治家を表舞台に立たせてやりたくても、彼に資金がなければ容易ではない。それに資金を提供し、正当な協力関係にあるのであれば、それは人類のためになることかもしれないのだ。が、別のニュアンスから一つのことが察せられる。

「別の組織があると？」
「いいえ。ＣＰＧにそんなものはありません。」
「・・・そうか。まぁ、俺もそこまで伝えるつもりもないが・・・。悪かったな。」
「それではお気をつけてお帰りください。これといったもてなしもできませんで申し訳ありませんでした。」
組織があっても個人的なものだというのだろう。イシガヤは経営に関してこのような嘘をつく人間ではないと見た。個人的なものなら、ＣＰＧで質問すべきことではないのだ。イシガヤが火星のジオン残党と交易していることを知ってはいるが、それも送られる物資は生活物資が中心で軍需品はとくにない。情報のやり取りはあるかもしれないが、そこまで調べることも容易ではないし、それが自分の求める真実のためにも、さしたる意味を持たないことが分かった。イシガヤの動きはある程度察することはできる。が、それは自分の理想と異なりはするが、それも一つの理想だと納得できるものだった。これは記事にするべきことではなく、自分の胸にとどめておくべきことだろう。彼が天道に背かない限り。

二日後、イシガヤにはイレギュラーなこともあったが、面倒な仕事を済ませた後、正確にはオニワの爺に委任した後、漣に帰還した。
「さて、帰ったはいいが・・・何じゃこりゃ？」
「それ？少尉がいない間にクリアちゃんがねぇ。」
艦長室をのぞき込みながらミキ中尉が呆然としているイシガヤに言う。いや、艦長室はイシガヤが居たときより片づいている。確かに片づいているのだが・・・足りない。
「なぁ、テレビは？」
「あれ？逝っちゃった。」
「他にも家電がたりなくないか？」
「殉職しちゃったよ。」
「・・・なんで？」
何を隠そう全てクリアの仕業である。書類を探しに艦長室に入ったはいいがものが散らかされていたためにつまずいて家電を壊し、せっかくだからということで片づけをはじめたのはいいが・・・転ぶ、つまずく、落とす、倒す・・・あらゆる家電はそのたびに殉職していったのだ。恐るべしドジっこ。
「・・・一ついいか？あそこにあった箱がないんだが・・・。」
「『淫乱美少女女子〇生』とかでしょ。宇宙の塵となったから。」
「うぐっ！」
「あんたカスミちゃんいるんだからさぁ、浮気はだめじゃん。」
「否！断じて否！だって他の女を抱いちゃあいない！会社の会長にかかわらずだ！いや、確かに制服は好きだ！しかし！まさかカスミ君にそんなもん着せるわけにはいかんだろ！第一！艦長が艦内で下手に女を抱くわけにはいかん！しかもカスミ君は性欲処理の道具なんかじゃない！大事な大事な参謀だ！あれほどの御仁はいないんだぁぁぁ！カスミ君万歳！！！」
「だからって力説絶叫しなくても・・・。」
「うぐぅ！カスミっ！」
「ミキさんありがとう。今度そういう箱見つけたら容赦なく宇宙の塵にしちゃって。」
「ラブラブだねぇ。その件は任しておいて。」
「ラブラブだぁぁぁ！」
ボスッ！
「のあっ！」

　カスミは、興奮気味のイシガヤの頭を書類で叩く。
　「・・・取り乱してすまん。とりあえず、俺の私物破損の件については不問にする。ただし、いつも言ってるが艦長室はともかく、クリアを俺の私室には絶対に入れさせるな。入ったら極刑だと伝えておけ。」
　「なんで？」
　「自爆装置に似たようなものがあるからだ。説明は以上！」
　そういわれた後ミキとカスミは艦長室から追い出される。
　「カスミちゃん理由知ってる？」
　「いいえ。タカノブ君・・・少尉は隠し事多いから。普段は開けっぴろげなのに家にはものすごい暗号かけた鍵のある倉庫があるし、ハルって言う男の人が訪ねてくると目の色が変わるし。なんかこそこそやってるみたい。」
　「男が浮気相手！？」
　「それは絶対にないから。」
　「つまんないの。でもそうかぁ。箱ん中そういう系なかったし。」
　「箱はともかく、ハルって人が来ると暴走？中の冷酷な感じより殺伐としてるのよね。」
　「少尉はあれでも大企業の会長だからねぇ。妻にも言えないことはあるでしょ。」
　「そういえば会長よね。」
　無理もない。趣味以外の特に衣食住に関しては全く庶民と同じもしくはそれ以下のレベルだからだ。仕事でもパーティーなど以外でブランドものは着ないし、市販のお茶漬けが好物だとかやたら粗食だし、家も普通で装飾品はカスミの趣味の絵画が狭い応接間に飾ってある位である。もっとも、移動が多いためいくつか別邸はあるが、接客用以外のそれは総て普通である。それに、会長なのに戦場にいる。・・・・・・ちなみに、家を豪華にして美人で可愛い『メイド育成計画！？』はカスミが当然却下した。本人もかなり冗談ではあったが。

　「そういえば。クリア、軍服と采配が届いた。以後使ってくれ。」
　久々に艦橋に現れてすぐ、そういってイシガヤは小包を渡す。
　「？おっきな軍配ですね～。それに～、ど～して連邦軍の制服なんですか～？」
　「エゥーゴの軍服でも良かったが、お前さんにはこっちが似合う。エゥーゴのは露出も多いしな。最愛のカスミ君にそんな辱めは与えたくない！・・・つうか、似合わないしデザインかっこ悪いし。やっぱ、日常は、質素でシックな感じが美しいだろ？よって、艦内社員以外の乗員は、これ以後皆上着を連邦軍の制服を着用とする。タキ少将が背後に居ることにしよう。で、軍配は格好いいから。」
　「この軍配、デザインも何かだし、おっきすぎですよ～。」
　「いや、クリア君！君は魔法少女に憧れたことはなかったか！？」
　「ありましたよ～。」
　「軍配はまさに魔法ステッキ！ビバ！魔法少女！ぐはっ！」
　イシガヤは例によってカスミに後頭部を一撃される。
　「・・・はぁ、クリアさん、これの言うことは聞き流して。」
　「・・・魔法少女・・・。魔法少女っ！いいですね～。これから使いましょ～。」
　むしろカスミの発言を聞き流してしまったようだ。
　「・・・・・・。」
　カスミとしてはもう何を言っていいか分からない。ミキは彼女らの後ろで必死に笑いをこらえている。ちなみに、ブラックは軍配として日本刀を用い、イシガヤは扇子を用いている。通常、せいぜいスティックを用いるのだが、この艦隊の連中は変わり者だと言うこ

とだ。
「イシガヤさん、よく見たら軍服にも肩に貴族みたいなひらひらがついてます～。特注品ですよ～。」
「あぁ、ロマンだ。肩のひらひらこそロマン！艦長、副艦長ともにお揃いだ！俺とブラックはマント付き！」
「というか～、大佐には鎧の一部までついてます～。」
「だってブラックがそうしろって言うからさ。格好いいからいいじゃん。」
「ですね～。」
制服の規格などあってなきがごとしのジオン流である。一概には言えないが、そうなると階級の高いお気楽極楽な連中はこうである。さらに意外と伊達者であるブラックでさえかってなデザインをしだすのだ。というより、艦内に日本刀を持ち込んでいる時点で軍規違反だろう。まさに特権階級のなせる技だ。
「艦長、お楽しみのところすみませんが通信です。」
通信兵が言う。流石に浮かれているわけにもいかないので通信に出るが、あまり良いほうの話ではなかったようだ。
「さてもさても、帰って来てすぐフォン・ブラウン陥落？だっりぃ。」
「イシガヤ艦長～、いかがなさいます～？」
「ほっとけ。グラナダは落ちないし。最低三個大隊くらい動員しなきゃ勝機はないさ。用意しやがったら俺は逃げる。で、クリア、お前は一時如月に移乗、艦長代理をせよ。数日の後、俺はブラックとライ連れて古なじみのとこへ行ってくる。」
「どれくらいで戻ります～？」
「分からん。」
「ジオンですか～？」
「古なじみだ。」
やはり察しが良い。とは言え、彼女は元ジオンではない。だからこそ、一応は言葉を選ばなければならないのだ。
「またしても通信です。」
「イシガヤか！お前たちはしばらくグラナダに待機していろ！」
少々月を留守にしすぎていたことを責める。
「悪いが、俺の自由は俺のためにある。申し訳ないですが、リー氏俺はあんたの兵隊じゃない。」
反論する。確かにイシガヤはリー氏の部下ではない。スポンサーとして同格である。むしろ、本質的には上の立場であるともいえるが。
「何だと！・・・まぁいい。フォン・ブラウンが陥落したのだ。ブラック・スターもグラナダにいろ。」
フォン・ブラウンが陥落した今、グラナダ防衛にも戦力は必要なのである。しかしながらブラックはアクシズとの接触をしなければならない。ある程度まとまった情報の分析を提出しなければならない。細かい情報はイシガヤ経由で送られたとはいえ。ここは、とりあえずはぐらかしておくことが最善であろう。離れる目的を言っていいわけでもないし、だいたい漣はイシガヤ次第の艦であり、リー氏やＡＥ会長に絶対的命令権があるわけでもない。
「スター大佐、任せたぞ。イシガヤ殿はこちらへ来い。」
イシガヤはやむなくリー氏の船に入る。通信中に入港してきたのである。
「どうみるか？」
「コロニー落としならともかく、私個人としては、ティターンズによるグラナダの制圧

は不可能だと思います。だいたい、艦艇数隻の戦闘要員なら皆殺しにできましょう。」
「よくいうな。」
「我ら、それくらいの用意はしてましょう。しかし、フォン・ブラウンについては私は知りません。」
「そうだな。ＣＰＧの主要施設はない。地球の情勢に変わりはないか？」
「知る限りでは。しかし、極東の日本・ベトナム・フィリピンは平穏無事です。」
「あれでか？」
「えぇ。いわゆる鼎立の情勢ですしね。それに、現在侵攻用の戦力余裕はどこにもありません。」
何かと経営上の問題から軍事戦略までを議論させた後、リー氏との会談を終了した。ことさら利益になることはなかったが。

数日後、アクシズ先遣艦にて。
「・・・シャルダン少佐か。」
「はっ！お久しぶりですスター大佐。」
「ふむ。久しぶりだな。」
「はっ！会議しつはすでに整えてあります。こちらへ。」

まずはライが地球侵攻作戦に対する概要を述べる。
「現在の旧ジオン勢力についてお話しします。まず、当社の本拠地日本及び東南アジアですが、ここには目立ったジオン勢力は存在しません。先年残党狩りにあいましたし。中国近辺ですが、ここも同様です。ただし、アクシズに協力的と思われる地下組織がいくつかありますので、接触しだいで多少の火の粉を上げることも可能です。しかしながら、制圧に向けては、非常な困難が伴うでしょう。比べてヨーロッパ、アフリカは旧ジオン勢力の温床となっており、これらは言うまでも無いでしょう。南北アメリカ大陸とオセアニアは虐殺の記憶があり、全くの問題外です。」
「なるほど、なかなかわかりやすい図表です。ところで、日本近辺が他とは違う黄色ですが、これは？」
図表には組織の名称から兵力、不満度が記入され、アクシズに友好的か否かで、地域的に五色に色分けされている。がそのうちに太い囲み線が存在している部分がある。そこを指摘したのだ。
「はい、これは当社の影響圏を示しています。日本はスズキ中将がいて、軍事は安定しています。また、当社やタキ少将がいて比較的スペースノイドに友好的でアクシズに対する拒否感もありません。加えて、ベトナムはスズキ中将の旧赴任地であり、盗る気になればＭＳの１００もあればすぐ陥落させられます。もっとも、最初にスズキ中将を口説く必要がありますが。」
「しかし、とうアクシズが１００も割くのは・・・。」
「当社から２０。タキ少将３０。スズキ中将５０。と、１００はありますが、防備のためにアクシズからは２０もお借り出来れば。また、ベトナムも日本も、単独でアクシズと戦う余力も力も無いわけですし。」
「・・・ふむ。作戦要項を考えるに、ヨーロッパの重要拠点を急襲。連邦首脳を確保後、ヨーロッパを侵略。アフリカは反乱を煽り、アジアは静観させる。当面はヨーロッパ、アメリカ大陸を敵とする。オセアニアはアジアとアフリカの情勢上、アメリカ経由でしか大軍を動かせまい。ヨーロッパはポルトガルからウクライナまで攻略し、海を越えてモロッコからエチオピア付近まで攻略する。そこまで出来れば他のアフリカとアジアはインドま

では雪崩をうって降伏しよう。その後は、ベトナムに反乱を起こし、日本とインド両面から攻め込めば中国はなんとでもなる。問題はロシアと南北アメリカだが、総力戦にならざるを得まい。政略と調略はハマーン摂政次第だな。」
「その地球侵攻作戦の勝算は？」
「あくまでも現時点の情勢でだが、私ブラック・スターを元帥に命じていただければ、確実に三年以内で実行できる。」
「ハマーン閣下が指揮をとられた場合は？」
「私が作戦参謀総長を務めて八割、このライ・クラウンが務めて五割。私の知る限り、他の将校では心もとないな。また、アクシズの生産性から考えて、これ以外の策では用兵での攻略は不可能だろう。」
「過信では？」
「いや。軍事に限れば、私に過信はない。」
「そうさシャルダン少佐。この黒い竜巻にＭＳ１０００も渡せば、アクシズを陥落させ、ティターンズを駆逐し、エゥーゴを吸収して地球を席巻可能だ。」
「ご冗談を、イシガヤ殿。」
「何、軍事はスター、政治はクラウンに、資金のやりくりは私の社に任せれば、あながち不可能ではないさ。アクシズの兵力はたかが知れているし、練度が低い。ティターンズはエゥーゴのせいで戦力は分散されている。各個撃破の後、その武名とクラウンの政治力でエゥーゴを吸収し、エゥーゴの理想を御旗に掲げれば、旧ジオン勢力は旧ジオンの将校の旗に集まり得て、有象無象の兵力をまとめきれば連邦のもぐらなど、もぐら叩きより簡単さ。ちなみに、そのファイルが要人のパーソナルデータだ。動向や思想、説得可能かなどわかるだけ記入した。調査費でるんだろうな？」
「はい・・・。ところで用兵以外では？」
「政略か、虐殺しかあるまい。が、虐殺は即座に勝たない限り、むしろデメリットが多い。」
「わかりました。ハマーン様にお伝えします。ですが、現在宇宙での開戦をいかにするかが目下の議題でしたが。」
「簡単だ。ハマーン様が出撃せずに、指揮官をしていれば勝てる戦だ。キュベレイなど破壊しておくが得策。」
「何故？」
「出撃したら、だれがまともな全軍指揮を出来る？私ならクラウンもいればサテライトという士官もいる。艦隊指揮程度造作も無いが。全軍指揮は優れた副将がいない限り専念すべきである。彼らと手合わせしてみれば分かるが、ティターンズもエゥーゴも兵力も分散が過ぎる。また、特定の艦艇のみ強力な兵力を有している。しかしながら、これらには多少の損害を覚悟して当て馬を使い時間を稼ぎ、敵主力を撃滅すれば充分である。」
「なるほど。聞きますとアーガマとジュピトリスがなかなかだと。」
「さよう。戦術的にはなかなか理想的な動きをしている。しかしアーガマのほうは戦艦に過ぎず、あれに固執する必要はない。また、ジュピトリスについてだが、この動きは私には理解できない。おそらく政治的行動をしているのではないか？」
「それはまぁ。ただ、パプテマスという大尉は腹黒いが戦力的にはたかが知れているし、企業や政治家連中との接点が少ないからな。」
イシガヤが付け加える。戦局のキーになるかもしれない事項だが、それも戦術的な一面でのみである。戦略的にそう重要なことではない。
「まずは、連邦軍首脳に賄賂を渡し、サイド３への宣伝。大衆を味方にして、月面の企業とコロニーの企業に協力要請工作をして、補給線の充実と安定が必要だろう。」

「戦術的には、現状５０機ほどの戦力があればことが足りる。両軍の間を上手く立ち回っているだけで良い。この間に補給艦隊充実のため、補給艦の買い入れや建造が重要だ。

コロニーの落ちる日

「あなたが司令代行ですか？」
「はい～。どのようなご用件で～？」
「モニターをお借りできますか？」
「用意できますよ～。こちらです～。」
　彼は、クリアの口調に対するイメージと行動の迅速さの差があまりに開いていることに舌を巻く。その口調ののろさは擬態だと疑いたくなるのである。初見においてそれをすれば、自らの才覚を隠すすべになろうから。
「これをご覧ください。」
「・・・コロニー落しでしょうか～？」
「はっ。そのようです。今日入った情報なのですが、いまだどこに落着予定かは掴めず・・・。」
「誰が指揮をとられているか判りますか～？」
「ジャマイカンという将校です。」
「では～、おそらくグラナダでしょう。その可能性が一番高いですね～。」
　躊躇の無い即断である。ジャマイカンをそれほど知っているわけではないが、イシガヤの資料中に性格分析などの資料があったのだ。それに、この空域にいる以上近辺の将校の分析は重要である。最近はライに変わってこれらの業務をこなしている彼女なのだ。普段の担当といえば、イシガヤが情報の収集及び提示を行い、ライの政治的影響分析、物資の増減、戦闘コストの計算を行なう。そして、彼女が戦略・戦術要綱作成、地形、敵情、分析を行い、ブラックが全てを統括する形式が続いているのである。クリア自身は、イシガヤの担当する情報の収集以外行なうことが出来るが、やはり適正に役割分担をしたほうが、奥深い戦術案を作成可能である。しかしながら、一介の士官である彼女には情報源は無いのだ。
「他に何か情報は～？」
「グラナダ市長からは、万が一に備え兵力を準備してくれと。それと、リー氏はアーガマとラーディッシュを差し向けると。核パルスエンジンを使うそうです。加えて、イシガヤ会長からは水爆の核弾頭を一基お預かりしてきました。」
「核・・・。ミサイルに装備が～？」
　その核とは、一年戦争でマ・クベが発見したものの一部である。クリアはその経緯は知らなくとも水爆からマ・クベがそれを放ったことを思い出したのだ。だからこそミサイルかと聞いたのである。
「いえ。突然でしたのでそのような装備はされておりません。旧世紀の物でして、ミサイルに積んではおりますが、ミノフスキー粒子下ではとても。」
　旧式な上にレーダーが使えなくては正確な射撃は行なえないのである。コロニーは動いているからして、ピンポイントに直撃させるのは至難であるというのだ。
「・・・そうですか～。分かりました～。如月及び漣は最終防衛ラインに位置します～。出来る限り～アーガマとラーディッシュでコロニー落しを阻止してください～。私たちは～最終手段として～、如月と漣両艦自爆によってコロニーの軌道を変更いたします～。その際核を起爆させれば～、おそらくグラナダへの直撃は避けられます～。」
「滄海や天宮は？」
「そうですね～、分かりました～。チカゲ、各艦に大佐の命令だと伝えなさい。各艦は我が艦に合流。また、大佐の命令により、私が旗艦如月へと移乗し、全軍の指揮をとりま

す。」
　「了解いたしました。」
　そういってうなる。並みの指揮官ではないのだ。作戦立案中に急変した口調の、相手を納得させるにたる響きや、眼光の鋭さ。それに加えてすらすらと立てられる作戦。並みの指揮官なら核の話題出た時点で、長々とした議論に陥るだろうし、それを、いくら宇宙だからといって、即座に使う判断は下せない。加えてためらいも無く自艦を自沈させる策である。仮にもクリアは副艦長であり、さらに司令としては副司令代行程度の地位でしかない。本来は、艦隊司令のブラック、副司令のライ、副司令格のイシガヤの三者が彼女の上にいるのである。これも並みの指揮官であれば、彼らの意見の無いうちに自沈の命令を下す度胸は無いのだ。あまつさえ、実際には命令の無い全軍の統帥権の使用、如月への移乗などやれる指揮官はそういない。下手をすれば軍法会議で銃殺刑であるのだ。ただ、如月移乗にしてみれば、如月の乗員に文句はない。ブラック、イシガヤが地球戦を行なっていた際の、漣艦長代行としての采配は実に見事であったからだ。それは副司令格の如月副艦長ライ・クラウンに全く劣らなかった。
　「私は如月に移乗し指揮をとります。ショウ曹長、あなたは漣への核ミサイル搭載を指揮しなさい。ミキ中尉、カスミ中尉、アリア少尉は如月へ移乗なさい。全員ブースター装備せよ。」
　先日、月で確保した試作ブースターである。使い捨てだが今日こそ使い時である。

　「作戦を伝えます。漣は、このままエゥーゴによるコロニーへの核パルスエンジン装着失敗に備えて、この地点での核搭載・爆発準備を行ないます。如月、滄海、天宮は、私の指揮に従いこれを死守。また、コロニー接近の後はコロニーに接触後全員脱出。自爆によって少しでもコロニーの軌道を変更します。」
　「サテライト大尉、君が指揮をとることに異存はないが、敵がこちらに？」
　「アークザラット少佐、そうです。こちらより少々多い敵がこの航路に来る予定です。戦艦２、巡洋艦３。こちらはどれだけの被害を出そうとも、仮に全艦撃沈されようとも漣を死守しなければなりません。」
　「戦術展開は？」
　「そうですね、ムラカミ少佐の滄海、旗艦如月、アークザラット少佐の天宮の順に鶴翼に開いて展開しましょう。なるべく討ち漏らすことのない様にしなければなりませんから。ＭＳ隊の指揮は、フルーレ中尉６機、ロウゾ中尉４機、ナカサト中尉６機に任せましょう。ロウゾ中尉は滄海の隊を三機指揮して砲戦による支援を、フルーレ中尉とナカサト中尉は自艦のＭＳ隊と滄海・天宮からＭＳを割き隊に加えるように。また、各隊も鶴翼に展開し、敵軍を中央で攻め潰します。」
　「なるほど。しかし側面を突かれた場合や、敵に鋒矢や中央突破の長蛇で突かれた場合、鶴翼ではいささか苦しいのでは？」
　「当然です。ですがそれでも守りきらねばなりません。万が一側面を突かれた場合は魚鱗ないし雁行に切り替えますが、出来る限り鶴翼を維持しましょう。時間が稼げればいいのであり、また、なるべく討ち漏らすことのない様にしなければならないのです。漣には直援ＭＳ隊を置きません。」
　「分かりました。たとえ一死をもってしても敵をことごとく討ちましょう。ところでエゥーゴの作戦の成功確率は？」
　「おそらく五分です。敵が多いそうですから。」
　「大尉、グラナダの防衛はいかがしますか？我々が抜ければ、その穴からティターンズの工作部隊が入り込む恐れがあります。」

「私もそれは懸念しますが・・・月のグラナダが消失するのと工作部隊が進入するのでは、予想される死者の数に大きな隔たりがありますから。万一工作部隊が進入してもせいぜい数千人の死者ですむはずです。」
「やはりそれしかありませんね。」
ムラカミもアークザラットもそう納得するしかない。たとえ数千人を見殺しにしても、数千万人の人間を救わなければならないのである。
「ナカサト、フルーレ、ロウゾ各中尉、お分かりですね？あなた方は何をしても敵の攻撃を防ぎきりなさい。・・・それがたとえ味方を殺すことになってでもです。」
「了解！」

「クリアも災難だよな。こんなときに限って奴等いないし。」
「えぇ。」
「ちょっとかわいそうに思えるわ。」
ドレン、ドメス、カスミの三者が感想を漏らす。確かに今回の作戦は人間としてつらい命令を下さなければならなかったのだ。これがブラックやイシガヤなら何の躊躇もなく下せただろうし、それにたいした感傷も持たないに違いない。また、ライにしてもそういったことは完全に、作戦と割り切れる人間である。ただ、クリアにとっては、他の指揮官に比べれば気丈に、そして冷静に実行できるかもしれないが、しかしトラウマにならないとも限らない命令である。それはムラカミやアークザラットにしてもそうだ。彼らではブラックなどの了承がないと、今日の命令が下せるかは五分五分であるだろう。もちろん、自分たちではその命令を下せる自信がない。
「ったく！あんたらしっかりしてよね！敵多いんだから！」
「そんなこといってもよ。」
「ドレン！やるか、やられるしかないでしょ！私はグラナダ市民を見捨てることはできないわ！やりたくないなら数千万人の恨みを買いながらどっかへ逃げればいいのよ！」
「私はナカサト中尉に地獄までお供しますよ。」
「ありがとドメス。」
「しかし背水の陣ですか。」
「いいえ。援軍のない背水の陣よ。」
背水の陣で有名な中国は漢（秦）の時代の名将韓信は、徴兵から日の浅くまとまりのない兵を背水に陣させ後退路をたち、敵を叩くしか生存の道のないことを知らせた上で、ひそかに精鋭２０００を以て敵城を占拠させて勝利した。これは、背水に陣した韓信の不利を見た敵将が全軍を城から出して攻めかかったことに勝機ができたのである。加えてそれさえも、若いころの臆病者と噂された韓信のことを知っていた、敵の首脳がいたからこそである。そうでなければ、留守居の兵隊が居て城を占拠するのは不可能であったろうから。
「総員出撃用意！」

「市長、ＣＰＧはこれよりＭＳ三機を戦線に投入し、ティターンズの暴挙に対応します。」
「そうしてくれ。しかし今からアーガマに接触できるか？」
オニワがグラナダ市長に言う。
「無理でしょうな。最終防衛ラインで核を爆発させ軌道をそらす作戦があるようです。そこに援軍として派遣しましょう。」
「核！？大丈夫かね？」
「最悪やるしかないでしょう？多少破片が降るかもしれませんが、手をこまねいているよりはましでしょうからな。」

「分かった。アーガマの成功を祈ろう。」

「アリア少尉、私の直援を頼むわ。カスミ中尉は後続。滄海のノーア少尉、ロイ軍曹、は私の左に。ヨン軍曹はカスミ中尉の直援。」
ミキが指示を出す。あまり深い陣形ではなく、鶴翼の右の翼を務める斜陣形であるが、それもやむない。ただし、カスミの長射程ガトリングガンがあるおかげで、火力は右翼のドレン隊よりは強い。
「おらおら！サイラス軍曹、ヴァルス軍曹、ラナ伍長！ちゃっちゃと俺の両翼につけ！カン少尉と　クレメンス曹長は後ろで支援だ！」
ドレンが旗下に指示を出す。布陣はナカサト隊に近いが、こちらは若干射程に劣るマシンガンによる援護である。ドレンの性格の猛々しさでは、敵に近接戦闘を仕掛けるのに適している。
「ホーク少尉、ドビルパン曹長、リーヴス曹長は拡散バズーカとバズーカでの各隊援護。敵の足止めを行ないなさい。弾薬を詰めたバズーカを正面の盾装甲板に複数個配置し、カートリッジの取替えより、バズーカそのものを取り替えてください。カートリッジの取替えは漣から得たＰＭＳ隊に任せます。」
ドメスが指示を出す。確かにカートリッジの取替えよりバズーカをとり替えるほうが早い。カートリッジを取り替えても銃身の熱が逃げなければ連射をしても命中率が下がり続け、ついには爆発する可能性もあるからだ。バズーカを取り替えるなら、銃身が冷える暇もできる。また装甲板である。はっきり言ってこちらの艦はあまり動かせない。戦艦というより巨大砲台に近くなるといえよう。そういう風に迎撃するなら余分な装甲板を盾にすることも充分効果的である。

「やっぱりきやがったな！全機攻撃開始！」
ドレンが吼える。人は向かって左へ攻撃する傾向が強い。故に、敵ＭＳ隊は中央とこちらに兵を集中させている。第一、鶴翼を破るにはどちらかの翼を突破することがもっとも定石なのだ。だからこそ逆翼にカスミを配置したといえる。こういったことは経験で分かる彼なのだ。
「ほい来た、ほい死ね！何やってる！俺が切り崩すから続け！」
「ですが射線が激しく。」
「激しいものかよ！臆病扱いされたくなきゃぁ、一機二機道連れにしやがれ！」
「ですがこのように敵が多くては突撃できません！グラナダを捨てましょう！」
閃光が上がる。
「サイラス死亡。前に進んで生き残るか、今俺に殺されるか！どっちがいいか！」
あまりに弱音を吐いたサイラスを討ち、ドレンが兵を煽る。興奮状態に持っていけば、死など恐れることもなくなるのだ。それには気付いたときには死んでいるのである。そして、そのためには弱音は禁物である。味方でも排除が必要なのだ。
「ドレンは逃げるやつを討ったよ！あんたらも気をつけな！」
ミキも同じ状況なら味方を躊躇なく討つつもりである。この度の戦いは、どれほどの被害をこうむっても勝つ必要のある戦いであり、悪鬼でなければならないのだ。そして、ドレン、ミキの鬼に勝てる兵などいない。

「やはりドレン隊が危ないですね・・・。」
すでにドレン隊はサイラス、クレメンス、カンが撃墜され三機に減少している。敵はかなり撃墜できたとはいえ、いまだにこちらより兵数が多い。ナカサト隊はノーアが討たれ

たのみである。ドメス隊はホーク、ドビルパンが討たれている。また、滄海の損害が大きい。そしてまたドレン隊のほうから閃光が上がる。ラナが討たれたようだ。
「ナカサト隊は中央へ。ドレン隊が壊滅寸前です。」
ドレン隊が壊滅しては、滄海を撃沈されそのまま漣に向かう敵も現れかねない。陣形を建て直し、横向きの衡軛陣形にするほうが得策かもしれない。ただ、敵を討ち漏らしやすくなることは否めない。このままでは如月を前面に出して敵の集中攻撃を受ける必要があるかもしれない。
「後方漣より入電。友軍接近！」
「何者か！」
近くにエゥーゴ艦は居ないはずである。ではグラナダにＭＳが隠してあったのだろうか？
「クリア大尉、」
「チカゲ、友軍はどこからどれだけ参りますか？」
「ＣＰＧの護衛機が３機、敵側面を突く形で参戦します。パイロットは都合セイバー、ランサー、スナイパーと呼称し、武装は名前と同様です。機体性能はマラサイ。」
「了解しました。敵側面を突いた後は、ドレン隊に入るよう伝えなさい。」
「了解。」
勝手に自分の指揮系に加えるが、イシガヤの指揮下の者ならたぶん問題ないはずだ。これが通常の援軍というものなら勝手に動き、こちらの命令を聞かないことも充分考えられる。しかし、漣要員は元来ＣＰＧ社員であるし、いままでそれに自分が命令を下していた以上、それらの人間と同様に考えても良いだろう。加えて、イシガヤの性格からも、自分が勝手に動かしても文句は言わず、むしろそれを望むと判断したのだ。彼は援軍によって味方の指揮系を破壊し、戦術の摩擦を引き起こそうとするほど暗愚ではない。『君命は受けざるところあり』を知る人間である。
「ドレン中尉、援軍があなたの指揮下に入ります。自由に采配しなさい。」
「わかったぜ、まかしときな！」

この後、十分で戦闘は終了した。ＭＳ隊ではサイラス、クレメンス、カン、ノーア、ホーク、ドビルパン、ラナ、ヴァルス、ロイが戦死し、ドレン、アリア、ヨンが負傷している。艦にしても滄海は中破し、天宮、如月も小破している。戦死者は８２名、負傷者１６４名。コロニーはアーガマ隊が落下地点を変えることに成功したが、こちらは相当数の損害を受けている。ただ、戦況を見れば必要な戦略観であったし、大きな損害に見合う戦果であった。なぜならば、アーガマ隊の作戦が失敗したとしても、この最終防衛ラインでコロニーの軌道を変更する手段は完全に整っていたからである。

戦の間に

「・・・宰相、陛下を同席なされては如何です。」
「しかし、ミネバ様はまだご幼少の身であらせられる。戦略などご理解いただけないと思うが。」
「さよう。しかしながら聡明であるからには、戦略を知る機会にはなりましょう。戦略論は戦場より血なまぐさくはない。」
ブラックは、暗に皮肉を言ってのけたのだ。ミネバが幼少にも関わらず戦場に連れ出したことを。本来初陣は、１５歳程に成長して心身が大人に近くなってから行うものである。早すぎては、戦場が怖いものとだけ認識されてしまうか、戦場の狂気にとりつかれてバーサーカーのようになってしまう。
「よかろう。会議室に先に行け。ミネバ様をお連れしよう。」

「ブラックか！この度は地球侵攻作戦要項を決める大事な会議である。ザビ家の為におまえの知恵を貸してくれよ。」
「はっ。陛下、ご着席ください。」
「うん。」
最初の返事はハマーンが教えたことだろう。シャアはそれを偏見の塊を育てるだけと嫌ったが、それは違う。シャアは所詮戦術家に過ぎない。ミネバは最低でも戦略家に育てねばならないのだ。何故ならば、彼女には強力な保護者がいないのだ。父もなく母もなく、かつてアクシズを治めていたマハラジャ・カーンもない。唯一頼れるのは現アクシズ宰相、ハマーン・カーンのみである。ミネバはハマーンを姉のごとく慕い、ハマーンもミネバを害するつもりは無いようであるが、この事態は幼君にとって危惧すべき事態である。元々幼君は侮られやすい。そしてハマーンの次第で、ミネバの進退が決まってしまうおそれがあるからだ。しかしミネバは聡明である。ならば少なくとも他の部下に算奪の野心をいだかせず、ハマーンにたいしてはその野心を抑える必要がある。幼君だからこそ言葉は多少尊大に、豪胆にみせる必要もあるのだ。それを偏見を育てるだけと言い捨てるならば、シャア自身がミネバの宰相になればよかったのである。彼の出自ならそれが出来たのだ。それを棄てた以上、ハマーンが政権をとるのは必然であり、自分などでは軍事顧問が限界であるのだ。
「ではブラック、意見を述べよ。」
「はっ、では宰相に意見を具申申し上げる。現在地球を席巻することは不可能であります。何故ならば、名のある連邦軍将校はさしたる敵ではありませんが、あまり名の知られていない連邦軍将校には、なかなかの曲者がおります。ですので、宇宙の制圧を主眼に置き、地球へ侵略の手を加えるとしてもヨーロッパに抑えるべきでしょう。」
「ふむ、お前にしては消極的だな。」
「はっ。アクシズの補給能力を考えますと。アクシズそのものは地球圏に運んでおると聞きますが、このなかにある軍需品、生活用品は一年が限界の量に過ぎません。生産設備はアステロイドベルトにありますし、それも連邦軍に比べて脆弱に過ぎます。また、輸送には時間がかかりすぎます。」
「生産設備と輸送艦の建造を急がせてはいるが、なかなか揃わない上に資源も少ないからな。」
「はっ。私としましては、声東撃西。アクシズによる地球侵攻作戦は、一部の戦力を割きヨーロッパに集中し連邦軍やカラバの目をこちらに向けます。その間に残る主力でコロ

ニーや月面都市を攻略するのです。勝って強を増すことが重要。こちらには旧ジオン勢力が残存していますから。」
「ほぅ。しかし・・・。」
「宰相の考えはわかりますが、先ずは宇宙の攻略が重要です。地球侵攻の足がかりを手に入れることが。また、連邦軍は宇宙より地球に執着いたします。これをして陽動し、勝ち取ったヨーロッパ地域を引き替え物件に和平を結ぶのです。」
「和平か？」
「さよう。和平です。ヨーロッパ地域を勝ち取り、これを引き替えにした和平なら、連邦は乗りましょう。この間に補給線の充実とミネバ閣下のご成長を待ちましょう。さにあらざれば、一度兵を退き、陛下のご成長を待つことがよろしいでしょう。少々苦しくはありますが、火星圏にスペースコロニーを建造すれば、都市化も不可能ではありません。」
「そうか。それも策の一つだな。」
「して、私は如何いたしましょう。」
「・・・お前には今まで通り敵の内偵を頼みたい。」
「・・・はっ。しかし・・・」
「お前を内偵に使うのはもったいないが、私には有能な手勢が少ない。まして、敵の中枢に付けるものなど。情報収集力があっても、イシガヤ如きの采配ではそれはかなうまい。また、ナカサトやロウゾと言う兵では階級が低すぎる。」
「はっ。」
確かにそれはある。大佐の階級で艦隊指揮もできる手勢が敵に紛れているのは、情報収集に有利である。そして、今のアクシズにブラックに代わってそれが行えるほどの将はいないのだ。ただ、ハマーンが漏らしたように、ブラックほどの鬼謀の将を作戦指揮官に使えないことは損害である。が、なんといっても有能な手勢が少ない以上、情報か戦力のどちらかを犠牲にしなければならない。
「では宰相、くれぐれもＭＳでの出撃はお控えください。ミネバ閣下も宰相の出撃にご注意を。」
「うん。」
「私からの大まかな戦略立案はこれにて終了させていただきます。地名・戦力・人名などの詳しくは、参謀の方々にお伝えします。ではミネバ閣下、私の戦略の中心は何と思われましたか？」
それは軍事顧問としての教育の一貫である。
「うん。補給の確保と私の成長だ。ハマーンの出撃を抑えることもか？」
「流石はミネバ閣下、余すことなくご理解いただけて何よりです。」
追従は一切ない。大将であるから声東撃西などの手段など枝葉のことである。それは軍人が知ればいい。この作戦で彼女が知るべきは、彼女が答えた三点で充分なのだ。
「ブラック、食事を用意してある。」
「はっ。いただきましょう。」

「ブラック、『孫子』という書物の解釈本は一通り読んだぞ。少し難しいな。」
「今はまだそれで良いのです。しかし流石はミネバ閣下、すでに目を通されたとは。その書物は時折に目を通すことをお心がけください。」
「わかった。次は何が良いのか？」
「・・・『十八史略』の簡略本があります。これをお読みください。」
「どういう本なのだ？」
「・・・古代中国の歴史書です。それにはかつての名君や悪君のことが書かれておりま

す。」
「そうか。その名君を見習い悪君にならぬために読むのだな？」
「はい。また、人の考え方をお学びください。」
「うん。」
「しかし、そのような古書が役に立つのか？」
「・・・宰相、人とは変わらぬ生き物です。字句そのものにとらわれず、その真意を察すれば、むしろ古書にこそ人を導くための理があると思いますが。」
「確かに人は変わらぬな。だからこそザビ家による人類の支配が重要だ。」
「・・・はい。しかし、私はザビ家云々よりも、ミネバ殿下による地球圏統治が重要だと思います。殿下であれば、古の聖王に優るとも劣らない理想郷を作れると。」
「嬉しいことを言ってくれる。私に出来るか？」
「そうです。今の地球圏で陛下に勝る貴人はおりません。是非永き平和を地球圏にもたらして、民に至福をお与えください。」
「努力しよう。ブラックも私の片腕になって平和をもたらしてくれよ。」
「はい。そしてミネバ殿下、努力もほどほどが重要です。」
「わかっている。努力のために努力をすることのないよう気を付けよう。」
「・・・宰相もです。」
「この私が？」
「そうだな。ハマーンは時々頑張り過ぎる。もっと楽にしなければならないよ。」
「ミネバ様・・・。わかりました。気を付けましょう。」
「しかし大佐、いつもより口数が多いな。」
「うん、ハマーンの言う通りだ。ブラックは普段無口で無表情だが、今のようにしゃべった方がいいぞ。きっと怖く感じてしまう者もいるからな。」
「・・・そうですか、申し訳ありません。」

「ねぇ、ライ。少尉って会長で最高責任者じゃん。軍艦にいて会社は大丈夫なの？」
「だいたいは問題ありません。グループ社の社長が細かいところはやりますし、今はオニワ副会長がいらっしゃいますからね。」
「社長？」
「えぇ。傘下企業です。卸売り、小売りの他に、日用品やエンターテイメント系の商品の開発、生産は、傘下企業に委任されています。」
「ミネルバちゃんのは？」
「支部ですか？本社の社長はイシガヤさんですが、普段はオニワ社長代行がそれら支部を取りまとめています。本社は精密機械、重化学、鉄鋼などの開発、生産を行っています。ミネルバ支部長は精密機械、大型作業機械を主に扱う支部の長です。また、地球上の傘下企業の監視も行います。」
「いなくていいの？」
「いたほうが良いです。ですが、ＭＳは精密機械の集合体ですし、戦争に必要な技術を直接知るのにも役立ちます。まあ、ここが重大なのですが、今イシガヤさんが会社にいると危険であるのに加え、あまり役に立たないんです。危険なのはティターンズの暗殺要人リストに載っているからで、役に立たないのは重役陣の影響が強いからです。」
「なんで？」
「イシガヤさんが最高責任者になって七年以上たちますが、それ以前から重役陣の力が強かったのです。皆さん能力は高いのですが、もう 60以上の高齢であるに加え、頑固でして。イシガヤさんはまだ二十代ですから頭が上がらない部分も多いわけです。対応するに

はどうしても古株でかつ能力の高いオニワ社長代行が必要なわけです。逆に言えば、オニワ社長代行がいればまとめられるわけです。」
「ダメじゃん少尉。」
「いえ。あと三年。長くて十年はそれで良いんですよ。優秀な重役がそれなりに残ってますから。ですが、重役が優秀だったために後進のリーダーが育っていなかったんです。ですので、今の重役がほぼ全員定年になると、社を支えるリーダーが突然三十代前半になるんです。実際、三年後には、オニワ社長代行の副会長役はまだ変わりませんが、本社の社長代行役は定年となりますし、重役の半数が定年退職です。そうすればトップはミネルバさんや私、ドイツ支部のアークライン社長、オニワ社長代行の孫のトモアキ資源開発部長などですね。そうするとイシガヤさんと同年代ですからイシガヤさんの強い影響が出るわけです。」
「あんたもミネルバちゃんも軍人出身よね。」
「そうですね。拡張期にありますから、軍略の応用が可能ですし。イシガヤさんの目下の仕事は人材の発掘と育成ですから。クリアさんも候補にはなったのですが、いささか政略には疎いようで残念でした。現在漣の乗員には、戦争後しかるべき場所に転属予定の方も数名います。また、この艦隊にいるのは都合が良いんです。ブラックさんの采配は強力ですし、場合によっては艦隊で諸勢力に潜在的な威圧が可能です。衛星軌道からモビルスーツで降下も可能ですし。」
「あんたは何で軍艦にいるの？」
「イシガヤさんの参謀として、また、社のリーダーになる見習いとしてですね。会長の考え方を知る必要があります。また、イシガヤさんは、細かい経営や経済の分析や技術は得意ではないので、その補佐が必要なんです。」
「リーダーがそれていいの？」
「ブラック大佐を思い浮かべください。索敵は索敵手、操舵は操舵手、修理はメカニックに及びません。また、私が参謀としてある程度状況を分析して報告をした後に、作戦を決定することもよくあります。リーダーは、それらの人材をまとめられれば、さしあたって合格なんですよ。」

「そうか。やはりオニワは良くやる。」
「はい。すでに資源アステロイドの採掘を始めています。採掘量は日に日に増えておりますし、このたび派遣する輸送艦には精製した鉱物資源を満載できる予定です。」
「ふむ。鉱石の質は？」
「良好です。具体的には・・・。」
「いや、具体的なことはいい。聴いても良くわからん。しかし費用対効果は十分なのだな？」
「それはもう。問題ありません。火星表層の資源もまた、なかなか良好です。」
「そうか。本社によく連絡し、採算性が見込めるならば、追加投資を行える。ただし、今回運んできた資源の量と質が十分ならな。そのあたりは手抜かりはあるまい。」
「もちろんです。それと、アクシズへの協力についてですが・・・。オニワ部長は１５％の線で条約を結びました。」
「１５か。いいだろう。そのあたりが妥当だ。」
「しかしイシガヤ会長、少し多すぎませんか？」
「いや、そこは俺にも義理がある。」
「わかりました。」
「しかしお前にも苦労かける。火星は遠く、苦しい場所ではある。本当にお前たちの力

には驚嘆を隠せない。このたびはよく休養し、英気を養った後またた火星での作業を頼む。うまい酒を搬入させるので、長い道のりの無聊をせめて慰めてくれ。」
「わかりました。」

「イシガヤ、スター、お前たちはこの大事にどこに行っていた！グラナダに居ろと言ったはずだぞ！」
「・・・申し訳ありません。」
「何か問題がありましたか？リー氏。」
「何かだと！グラナダにコロニーが落ちそうだったことを知らないのか！？」
「知っています。防ぎきれたではありませんか？」
「そうだ！アーガマの奮戦によってな！しかし問題はその大事にお前たちが居なかったことだ！アーガマが失敗したらどうする気だった！」
「解せないですね。アーガマが失敗するかも知れないのに、市民を避難させなかったのは誰か知らない私ではありませんよ。それに、私たちの兵力は司令代行が的確に運用し、最終防衛ラインでの核攻撃によ軌道変更を行なえる状態にありました。アーガマが失敗しても二段構えの体制だったわけです。」
「だが、スターが居ないせいでその艦隊が受けた損害を知っているか！どれだけの金がかかると思っている！」
「ブラックと話し合いましたが、司令代行の戦術は的確でした。あの防衛線はどれだけの被害を出しても維持しなければならない場所でしたから。それもこれも、グラナダ市民をあなた方が避難させなかったからです。避難していたらあそこまで死守する必要もなかったのですから。加えて、アーガマとラーディッシュの作戦についても、こちらに詳しい情報が来ていませんでした。もっと早くにあなたが情報をよこせば、ラーディッシュの増援に二隻の艦艇を繰り出せました。だいたい、私はあなたの部下でもないし、私の企業はあなたの傘下でもありません。私にも会社の仕事はある。言わせてもらえれば、こっちもとばっちりを受けているんです。若干月の信用が落ちましたからね。それでも社の防衛機を繰り出し、社員を非常時に備えて動かしたので、がた落ちにはなりませんでしたが！」
「なんだと！スターはどう思っている。」
「・・・居なかったことは申し訳ありません。しかし、司令代行は的確でした。戦略的にも戦術的にも評価されて然るべきです。また、司令代行の作戦は的確でしたが、私でもそれが成功するかは不確定であり、あれ以上の損害を出していたかもしれません。あれですんだなら軽微なものです。」
「大損害だぞ！」
「必要な損害です。もしアーガマが失敗することを考えれば。兵力的にアーガマのほうが戦力不足でしたので。数式的にも単純にＡとＢが艦艇５対４で戦ったとして、本来Ｂが全滅した時点でＡは３隻の艦艇が残るのが、ランチェスターの第二法則による結果です。司令代行は、その不利な状況で敵を壊滅させたのですから。ＮＴやガンダムは交換比を考慮しても実質的に大した戦力ではありません。」
「なんだと！」
「・・・戦争は数をそろえることのほうが重要です。戦略戦術の基本は敵に勝る戦力を、決定的地点に投入することであり、その質は標準的であればまず問題はないのです。普通に考えて、１機のＭＳが２０機のＭＳに勝てることはまずないのですから。」

父との再会

「・・・父上、ご無事で何よりです。一年戦争でお亡くなりになったと思っていましたが・・・。」
「いやさ、アフリカなんか反地球連邦組織に入っていてな。連絡をしなかったことをすまないと思っている。」
ブルー・スターが言う。彼は一年戦争で潜水艦部隊のＭＳ隊隊長を務め、周りでは『蒼い城壁』とも言われたパイロットである。もっとも、その知名度はごく限られたところにしかなかったが。彼は流石にブラックやレッドの父親であり武人として相応に優れているが、祖父に比べれば政治力に欠ける点がある。そのために没落しかけたスター家の家名を、武勇で取り戻そうとしたのである。が、それも容易ではなかった。、ブラックこそ当代随一といえる指揮官として名を馳せ、アクシズでも相応の地位が用意されたが、彼自身は前大戦の終結の後、他のジオン残党兵とともにアフリカなどに逃亡するしかなかった。その後にデラース抗争で居心地が悪くなり、幾人かのジオン兵とともにエゥーゴに参戦していたのである。が、息子の武名の障りにならないように、今まで連絡を取らなかったのである。
「・・・いえ。御身がご無事であればそのようなこと。レッド、父上の守護ご苦労。」
ブラックは弟のレッドに礼を言う。それはマキタの艦隊がブルーの所属するエゥーゴ部隊と交戦し、捕虜になったブルーをレッドの懇願によって丁重に扱ったことである。そして、その状態のままマキタ隊はエゥーゴに下ったのである。
「ふん！父さんを守るのは子供の役目だろ！」
「・・・そうか。マキタ殿、会議室で責任者クラスの尋問を始めねばならない。ご足労願う。」
「分かりました。」
ブラックのレッドに対する態度は淡白である。今はあくまで司令なのだ。レッドは降服者に過ぎない。

「・・・なるほど、ティターンズが気に入らないと。ご家族は人質にされるかもしれませんが・・・。」
「毒ガスやコロニー落しなどを最近知ったのだけど、あれは人として問題でしょう？気に入らないのでエゥーゴに参戦しようと考えたのです。僕の家は連邦でも少しは知られた家ですから、そんはないと思いますよ。」
政治駆け引きで多少の得はあるだろう。マキタのパイプが使えるだろうし、連邦の名門が寝返ったというのも効果がある。
「俺はマキタに従っただけだ。」
「・・・そうか。」
レッドが言う。まぁそうだろう。知恵が深いわけではないし、それこそティターンズが嫌いになったと言うだけで寝返ったのだろう。そういう男だ。もともとジオンの名門（没落していたが）スター家の次男であったのに、ジオンが気に入らないという理由で連邦に出奔し、連邦軍人になってしまった男なのだから。
「わたくし、あのような無粋な真似はしたくありませんわ。それに、司令がエゥーゴに行きたいと言うんですもの。それに従うことが、私の仕事ですわ。」
艦長のイリーナ大尉が言う。マキタ隊の最高司令官はマキタのようだが、専属艦長はイリーナ大尉のようだ。しかし、彼女にしても大きな政治理念などで寝返ったわけではないようだ。

「・・・どうだ？」
　ブラックは、遅れてきたイシガヤに尋ねる。
「良いんじゃないか？敵ではないようだ。それと、マキタ少佐、君の部下にスパイが三名いたから勝手に殺した。」
「なっ！」
「こっちに寝返るなら造反者を降ろしてからきてくれ。」
「だれが・・・」
「これが認識票。」
「・・・彼らがスパイでしたか・・・。次からはいきなり殺さないでくれ。」
「努力する。しかし久しぶりだ。」
「・・・マキタ少佐、部下が失礼した。君はこのまま五番艦として所属してもらいたいが、構わないか？」
「わかりました。けれど、こんな程度の取調べでいいのかい？」
「・・・NT 同士だ。嘘かどうかわからないこともあるまい。むしろ、君とスター中尉のほうが私より強い力を持っているようだ。」
「そうですね。私の艦には NTは六人います。元はその実験部隊ですので。」
「わかった。・・・しかし、私は NT を特別扱いをする気はない。以後、我が指揮の元、奮戦せよ。詳細は副官のライが説明する。」
　そういってブラックとイシガヤは部屋を出る。後はブルーの処置である。
「・・・スター大尉、貴官はエゥーゴに復帰するわけだが、原隊はどこか？」
「０２１小隊だ。しかし、俺を除いて全滅した。できりゃぁ、息子の部隊を見学したいものだな。」
「・・・口を慎め。原隊復帰が出来ないのであれば、我が隊で収容する手続きをしよう。明後日、当三番艦滄海・四番艦天宮の乗員入れ替えがある。この際滄海の MS隊指揮官兼教官として着任せよ。以上。」
「了解！」
・・・しかし、イシガヤの手腕は恐ろしい。無情にもすでに殺害してのけたのだ。

「親父、兄貴の奴冷たいと思わないか？前大戦では問答無用に殺しあったし、今の態度もさ。」
「お前たちはもっと仲良くできんのか。ブラックは艦隊司令なんだから感情を抑えなければならん。お前も感情で造反をするところを直さねばならん。中尉ならばそういうところが必要だ。」
「けど、そっけなさ過ぎるだろ？」
「あれは、爺さんに教育を受けたからな。俺は将軍の道を学ばなかったし、お前にも教えなかったが、あれは将軍としてスター家の再興を願って教育を受けたのだ。確かに人間性にかける部分もあるが、なかなかいい将軍じゃないいか。自慢の息子だ。そして、お前もな。」
「そうかよ。だけど兄貴はきにくわねぇ。あのあとまだ顔をみせやしねぇ。」
「鳥海が降服した手続きもあるだろうし、どうも二隻の人員を入れ替えるそうじゃないか。事務作業があるんだろう。いくら部下が優れていても、管理して判子をおさなにぁならん。」
「そんなもん後でもできるだろ？」
「お前はスター家の財産管理さえしたことが無いからわからんかも知れんが、俺はそれが面倒で軍人になったんだぞ？大佐にもなればそれ以上の仕事がまっている。生真面目な

あれがそれを放り出して家族のところに来るものか。しかしな、生真面目で私を捨てて働いているだけで、家族をないがしろにするようには育てていない。みろ、俺がこの部隊に再編されたからな。俺の気持ちを踏まえてくれたんだろうさ。」
「そんなもんか？」
「そんなもんだ。」

「・・・父上、お久しぶりです。」
「いいのか？」
「はい。休息の時間でありますし、艦橋には良き部下が居りますれば。」
「そうか。それにしてもお前は出世した。よくもまぁ大佐になったものだ。」
「はっ、ありがとうございます。不肖なれどおじい様、父上の教訓のおかげです。しかし父上、ご無事であったのならもっと早くご連絡いただければ。」
「悪かった。家はどうなっている？」
「はい、サイド３の家は売却し、仙台のおじい様がお使いになられていた旧宅に移りました。代々の墓もそちらにあるわけですし。また、会社の経営は私には荷がかちすぎましたので、知り合いの CPG会長に売却しました。申し訳ありません。」
「CPGの会長と知り合いなのか。噂には聴くがあそこなら爺さんの名を傷つけることもあるまい。気にするな。父とて経営をせずに軍人になったのだ。レッドもその才覚がない以上やむをえないことだ。」
「そういっていただき幸いです。ところで父上、父上はまだ戦場に立つおつもりですか？お望みでしたら、シャトルをご用意させます。レッドの件もありますし。」
「いや、出来れば軍人として置いてもらいたい。俺もレッドも戦場が向いているようだ。お前こそ伊達宗家の跡を継いだのだろ？」
「はっ。申し訳ありません。父上が生きておられればこのような勝手を・・・」
「そのことはいい。むしろ良かったではないか。」
「・・・ありがとうございます。」

どうということなく数日が経過した。ただ、ブラックとレッドの溝は埋まらない。

束の間の道楽。蹂躙戦

「故に、ティターンズ輸送艦隊を叩く。」
補給のために月に入港する直前、月面の観測基地においてティターンズ輸送艦隊を捕捉したのである。最も近い位置にいるこの艦隊に殲滅命令がだされ、急遽入港を取りやめた。接触まで３時間。敵もおそらく気づくだろう。しかし、情報によれば資材をつんだ輸送艦隊である。こちらの艦隊の速度にはかなうまい。また、接触までに合流できる敵艦隊は巡洋艦１隻に数席の駆逐艦クラスだけである。
「・・・しかし。」
「罠、という心配ですか・この状況でそれは無いと思います。また、輸送艦隊に強力なＭＳ隊が潜伏していたとしても、機雷を散布しつつ全力で逃走すれば問題ないでしょう。」
「・・・ふむ。」
そして思うのは、敵が護衛艦隊をつけていないことだ。大規模な輸送艦隊であるにもかかわらず、これである。杜撰なのか、兵力が足りないのか。
「・・・ＣＰＧの輸送艦は？」
不意に気になったのは、しばしば単艦で物資を輸送してくる CPG社の船である。
「？・・・あぁ。それはですね、戦場では高速輸送艦を使用しているじゃないですか。積載量は少ないですが、艦速は巡洋艦以上です。また、商船に関してですが、重要なものには護衛用に巡洋艦春菜の精鋭を差し向けます。しかし、通常は商船攻撃は行われませんし、海賊も減少しつつあります。加えて、ＣＰＧの報復攻撃の苛烈さは、そういう無頼の輩に知れ渡ってますしね。」
「なるほど・・・。」
確かに、ＣＰＧは一度小規模な海賊の巣を、商船を損傷させられた報復のために、徹底的に破壊しつくしたことがある。あの時はちょっとしたニュースになったものだ。

「今回はエゥーゴに参戦して最初の大きな戦いだよ。みんながんばって僕たちも力を見せてやろう。」
「お任せくださいな。少佐のお背中は私が守りきって見せますわ。」
「敵を殺しつくしてやるぜ！」
イリーナとレッドがいう。

「敵輸送艦隊と接触します！」
「・・・各艦鋒矢。先鋒は鳥海。続いて如月、漣・滄海、天宮。ＭＳは各自乱戦に備えよ。」
確認されている輸送艦は８隻、これに巡洋艦１、駆逐艦８が護衛についている。予測されるＭＳは１５以下。対する当軍は戦艦１、巡洋艦４、ＭＳ２８である。圧倒的戦力差だ。

「砲戦用意！少佐、よろしいですわね？」
「うん。イリーナ大尉、艦は任せるよ。ＭＳ隊は僕に続け！」
「久しぶりの蹂躙戦ですわ。ゾクゾクしちゃう！」
「艦隊司令の作戦は手堅いですね。」
「えぇ。スター大佐も、クラウン君もサテライトさんも堅苦しくて困るわね。得体の知れないイシガヤ君もあれで堅苦しいの。イーノ砲術長、初弾は引きつけ、華やかに撃ちますわ！」

「了解！」
とはいえ、イリーナ大尉も手堅い方だ。蹂躙することを好みはするが、無謀な突撃はしないし引き際は早い。突撃艦隊司令なら充分務まる人材である。そしてニュータイプである。もっとも彼女のニュータイプ能力は著しく低い。元来、マキタ隊はニュータイプ実験部隊の意味合いが強いから彼の旗下には６名のニュータイプが存在する。が、結論からいってニュータイプなど大した意味はない。マキタとレッドは流石にニュータイプと言えるが、他はエースパイロットに勝てる才覚はない。マキタ隊でも有力なＮＴパイロットのウェポン少尉ですら、カスミと戦って互角以下である。
「射程圏に入ります。敵艦発砲！」
「まだよ、まだまだ。」
「ミサイル来ます！」
「よろしい、最大加速！ＭＳ発進用意！」
鳥海の加速で如月との距離が開く。巡洋艦と戦艦では速度に差があるのだ。とはいえ、如月後方の漣も加速してこれに続く。艦長はイシガヤだ。
「第二射きます！」
「全砲撃てぃ！蹂躙せよっ！少佐のダンスを邪魔させはしないわ！」
鳥海の砲撃は敵のミサイル群を薙払い、閃光を煌めかせながら敵艦隊に突き刺さる。一斉射後ＭＳ隊が発進。後、全力砲戦にかかる。
「味方巡洋艦が遅いわね。我に続けと打診。遅れれば、いいとこは私と漣で取っちゃうわ！」
「それにしても、漣の陣取りは旨い・・・。」
「敵巡洋艦からの直撃を回避し易いコースですわね。私の艦と直線上に居て。」
「卑怯とは思いませんか？」
「卑怯？戦闘中にそんな無粋な言葉聴きたくないわ。あれは第二陣の知恵よ。むしろまともにぶつかるだけならバカでもできるわ。イシガヤ君が陰でなんと言われているか知っていて？『海賊』よ。」
「『海賊』？」
「えぇ。横槍を入れるのが上手でいらして、いいとこ取りが得意だからだそうよ。陰口にしてはなかなか美しくいらして。」
「そのような・・・」
「観いて御覧なさい！操舵手、敵巡洋艦を狩るわよっ！」
「駆逐艦やＭＳは！？」
「駆逐艦は大佐や滄海、天宮が狩っているじゃない！ＭＳは少佐達が。何を観てるの！」
「ですが・・・。」
「私は駆逐艦にガリガリ薄皮剥がされるのはイヤよ。弱々しい輸送艦を爆散させて、巡洋艦という華を狩ってこその喜びでしょ。漣も同様だわ。こ・れ・は、どちらが多く輸送艦を狩って、巡洋艦を討つかの勝負なの！」
現在のスコアは両艦ともに２である。漣は観測装置の関係上、鳥海に比べ主砲が２門少ないのであるが、しかし鳥海に比べいい陣どりの分で差し引き０である。また、若干艦速が早いため、徐々に鳥海との距離を詰めつつある。
「敵艦隊は逃げ始めました！」
「輸送艦は逃がすんじゃないわよ！」
「はっ！ですが、残り二隻には漣のＭＳが向かいました。」
「そう？じゃぁ巡洋艦に集中するわ。楽しめそうねぇ。」
「・・・はっ。」

「あなたも、もっと楽しみなさい。拡散ミサイル用意、華を開け！」
鳥海の拡散ミサイルは攻撃のためと言うよりつゆ払いのためである。敵のミサイルを防ぎ、ＭＳの接近を阻止するためだ。
「漣さらに加速！」
「ふふ〜ん。海賊さんが来たわっ！主砲用意！命令までこらえなさい！」
「漣全力射撃に入ります！」
「せっかちなんだから。副長、私と彼の違いがわかるかしら？」
「艦長の方が、戦闘を楽しんでいることでしょうか？」
「それは違うわ。だって、企業の会長なのに戦場にいる方が道楽でしょ？私はれっきとした軍人だもの。」
「・・・。」
副長としては、見るからにイリーナ艦長の方が楽しんでいるようにしか見えない。漣の艦長は、戦闘中に嬉しそうに笑っていることがないからだ。もっとも、イリーナ大尉に比べたらにすぎないが。
「彼は主役ではないのよ。」
「はっ？」
「いい、彼は誰かに使われて初めて役に立つ人。自分から使われようとするわ。だけど私は人に使われることがない人。」
「それより主砲を！」
「あなたもせっかちね。今主砲を撃てば艦速が落ちるでしょ？漣に追い抜かれるじゃない。後３０秒。」
確かに同じサラミス級とはいえ、漣は改造艦である。長時間今のスペックを維持することは出来ないとはいえ、一時間程度ならこちらの１０％増しの戦闘性能を維持できるのだ。
「に、しても、鳥海のイリーナ大尉やるなぁ。惚れ惚れする。各砲鳥海を支援せよ。」
「よろしいのですか？」
「競いたいところだが、あんなに惚れ惚れする働きを見せられればそうもゆくまい。全力で支援せよ！鳥海を沈めさせるな！」
「艦長、漣が当艦の支援に回ります。」
「言ったでしょ？彼は脇役なのよ。主砲放て！全力射撃！艦速そのまま蹂躙せよ！」
何発かが敵艦のブリッジに直撃し、命四散するギリギリを鳥海は突き抜ける。
「やりました！」
「しくじったわ。副長見なさい。」
「なにをです？」
「漣はもう敵駆逐艦側面を突き始めたでしょ。」
「それがなにか？」
「私の可愛い鳥海ちゃんは、反転その他に２分以上かかるわ。」
「それがなにか？」
「バカね。漣はもう攻撃してるのにこちらときたら２分以上かかるなんて。」
「ですが駆逐艦と戦えないほうがいいのでは？」
「何を考えていらっしゃるの？誤解なさっているようね。私、先陣となって駆逐艦艦隊に突撃するのはいやですけど、この状況なら違いますわ。なぜなら、横腹を見せている駆逐艦なんて良いかもですもの。」
副長は心の中で『うわぁっ！』と思う。彼に許されているのはたったそれだけの反抗である。

　戦闘後、グラナダに入港した。さすがに補給と修理をしなければならない。そこではＡＥの使者が待っていた。
　「ＡＥが大佐にガンダムタイプを差し上げると。Ｚタイプの改造機で、変形機能はありませんが、機動性は高く・・・。」
ガンダムタイプの提供は、ブラックの武功に対する手当ともいえる。
　「・・・スペックカタログを」
　「これです。」
　「・・・・・・ふむ。これは必要ない。他の方に回していただきたい。」
　「はっ！？ガンダムですよ！装甲も機動力もあなたのハイザックより上です。」
　「・・・それはわかる。が、この艦のＭＳとの相互の武装交換に問題がある上に、違う装甲材質では補給が面倒になる。また、ジム・ネモ系とジオン系ともシステム上の違いが多い。如月・漣は常に行動を伴にし、ＭＳは改造機が多いとはいえシステムは共通であり、私のハイザックもなるべく共通になるように手入れがされてある。スペックもバーザム程にはある。武器弾薬も共通であれば、装甲も同様。補給はＣＰＧからでも揃えられるが、その機体は無理である。」
　「しかし誰もが羨むガンダムを。それに会長も是非にと。ニュータイプのエースの一層のご活躍のために。」
　「ニュータイプもエースもさして戦局を左右するものではない。采配と物量のほうが重要。また、私は司令である。パイロット業は、枝葉の技である。」
　「しかし・・・」
　「ブラック、くれるもんなら貰っとけ。」
　イシガヤが口を挟む。
　「そうですよ！」
　それに元気を取り戻した使者がここぞとおす。が、
　「バラして使い捨てれる外付けパーツに改造してやるから。」
　「なっ！」
　ガンダムをバラす。そして使い捨てパーツにする。ガンダムの誉れもへったくれもない。
　「大佐、いらないなら僕にいただけませんか？」
　「マキタ少佐か。よかろう。」
　まさに即断。
　「しかし！」
　「・・・気になされるな。マキタ少佐は立派なＮＴのエースであり、『堕天使』の異名を持つものだ。パイロットとしては私も敵うかわからない者である。」
　こうしてこの影の薄いガンダムは、『ｊｒ』と名づけられ、マキタ専用機となった。

その心は徒然に

ブラック・スター

・・・戦争か。と思う。私は戦争に身をおいている。今は乱世にあれば、戦争において多数の人間を殺すことも許容される。艦艇を沈めれば千の人間を殺すこともある。が、私にはそれはさしたることではない。しかし、どうもクリアが言うにはそれとて悪に分類される。彼女はそれでも将校であれば敵を討つ。が、一般人はどうだ。彼らは戦うすべを持たない。彼らにとれば我々は武器を持つ野蛮人なのかもしれない。その罪は認めよう。だが、なぜ人はかくも業の深い生き物なのだろうか。人の歴史は戦争の歴史である。中国では紀元前からの戦争の歴史があり、同様にエジプトやローマにもそれはあった。我が愛するところの日本にしてみてもそれは同様である。思えば、我が先祖は他人との戦いに留まらず、肉親との戦いにも明け暮れた。伊達氏の天文の大乱などがその代表である。そしてそれながら、塵介集という国分法を定めて統治を行なっていた。それは、人間には法が無ければ平穏が無いということなのだろうか。我ら以外の動物には、それにルールがあっても、法は無い。生存のために同族を殺しても、利益のためだけに同族を狩ることは無い。霊長類やある種の動物は名誉のために同族と争うが、それは生殖のためである。それからすればそれはやはり単純に生存のためである。しかし人間はそれ以外で殺しあう。加えて人間の進歩は無い。私の愛読書の一つは『孫子』である。この戦争の本は紀元前に作られたものだ。その戦争の本が今なおその彩を失っていない。それは、まさに人間の進歩がないことを意味している。今、戦争は地球圏に充満している。私はその中でも相応の軍を指揮する将である。私はそれだけの人命を預かっている。我が任務は敵を殺し、部下の命を守ること。そのためには敵に対する慈愛の感情は必要としない。例え義に反しそれが悪と言われようともかまうまい。殺し殺し殺し、ひたすらに部下の命を守るだけであるから。ただ、一つ罪があるとすれば、私が戦争を楽しんでいることだ。そう、私の頭脳は戦争の技術に特化している。幼少より、そう育てられたからでもあるが、やはり自分の策を実行できる楽しみはほかに無い。ただ、その策の実行を楽しんでいるのである。そこに大それた野望がない。名声欲、金欲、権勢欲など。すなわち、私の欲は明らかに人間独特の欲であり、まさにエゴでしかない。だが、私は将軍としてはその独特さゆえに有能かもしれないが、人間という動物としては、明らかに失格である。動物的な感情を持ち合わせていないからだ。

『悲壮』

我が采配に　散る者よ　我が引き金に　消ゆ者よ
その無念　無常の風に乗せよ
人を統べる者の常　死に逝く者は闇に消え　生者をのみ顧みる
感情などいらぬ
あふれる感情は人々を滅ぼそう
幸福などいらぬ
獣の嗅覚が鈍れば人々を滅ぼそう
私は黒い竜巻
竜声に吼え　風を起こし　我が敵を討ち滅ぼす
善悪を超え　空を翔けて　破壊のみを繰り返す
生まれながら孤高の竜

タカノブ・イシガヤ
　南無釈迦牟尼佛・・・。別に私のために唱えるわけではない。その日殺した者へのせめてもの手向けだ。許しはいらない。別に罪とは思えないし、だからこそ許しはいらないのだ。私はかつて暗殺者であった。善悪を知らないまま命令を実行した。流石に今は命を守るとき以外に暗殺技術は使わない。部下にもそれを徹底させている。なるべく流血を避けたい気持ちはある。ただ、なるべく流血を避けたいから、私は十を殺して百を助ける。それに躊躇はしない。私は強欲であるから、やはり多くの人命を助けたいのだ。全てを助ける、そういう面倒で偽善的なことは言わない。思えば七年前私はコロニーに毒ガスを注入した。命令であった。数千万の人命が失われたのだ。今私が戦争をして幾人かの人命を損じてもそれは微々たるものだろう。はっきりいって、そのあたりの感情が歪になっていることを否めない。ブラックもまるで機械のように戦争を行い敵を殺すが、私よりはましかもしれない。彼は歪んでいるのではなく、理解できていないだけなのだから。加えて、私はいまや大企業グループの会長である。もっとも、業務自体にそれほどの干渉はしないが。ただ、最高責任者である以上、万が一の場合には命を失うことも当然であると考えている。そしてまた、私は社員達の生活を守らなければならない。表で連邦と手を握り、裏でアクシズやエゥーゴと手を握る。残念ながら、私には大軍を容易できる器量が無い以上、そういった手段をとる必要があるのだ。本当は大恩あるキシリア閣下の姪ミネバ閣下に忠誠を誓いたいが、すでに部下や社員を大量に抱える身となっては、それも容易には行なえない。今となっては狂気に従うことが不能である。ただ、無為に無常の風を感じ、その無為さえも儚きを知る。

『悲愴』

　経るほどに　心の闇は　深まりて　過ぎし月日は　血にぞ染む
　然れども思わるるかな
　その過ぎ行く月日に
　かつて得た安息の日
　私の夢は　久遠の平和と　干戈の響き
　その相容れない衝動に駆られ
　その狂気はこの身を焦がし
　忠義のために人を殺し
　愛を守るため誰かの愛を壊す虚しさ
　世の中の総ては矛盾を内包し
　その矛盾を超えて生きる者の悲愴は・・・

クリア・サテライト
　私は、戦争が好きではありません。ですが、戦いはやむをえない事です。なぜならば、現実に戦争が起こっているのだから。しかしながら、人とはなんとむごいものでしょうか。毒ガスやコロニー落としを行いあまたの命を失わせる。これは前世紀の核に勝る外道の所業です。一年戦争を経験し、士官学校に入学しました。養父が連邦軍将校だった影響もありますが、せめて私だけは外道になりたくないからです。また、戦争をとめるためには、民間の活動家になる術もありましたが、考えてください。ペンは剣に勝つとは言いますが、歴史を顧みて、剣に負けたペンは多くはないでしょうか？ですから、私は血塗られた剣の道を選んだのです。相応の地位につければ剣で剣を断ち、正道を保つことも可能だと信じ

たのです。ですがこのたびの戦いで自らの無力を知りました。新人でしかありませんでしたが、とてもティターンズという剣に対抗することは出来ません。一般将校に秘匿されていた１３番地事件を知って、私は造反しました。どんな理由にしろ、無差別虐殺は人の行なうべき所業ではないのです。造反当初は、自らの愚かさを少々悔いました。所詮剣にもなれなかったのだから。ですが現在、自分は恵まれていると感じます。今の部署で私は中尉に過ぎません。いわば小隊長かそれより少しうえ程度の階級です。しかしながら私はこの小艦隊のブレーンとして行動できるのです。少なくとも少佐以上が務める巡洋艦の艦長の名代を務めますし、時に司令である大佐の、作戦を左右する戦略戦術提案を行なえます。それは、相当の剣であり、外道の所業に一矢報いることも可能な環境なのです。加えて、この艦隊自体が恵まれています。物資は充分であるし、情報も多いのですから。また、イシガヤ艦長は明言しませんが、この艦隊の実質的影響力は小艦隊程度のものではありません。艦隊の一個中隊に勝るほどでしょう。ただ、私の心残りは血で血を洗う術でしか、正道を保つ術を知らないことなのです。

『 for wish』

私は吹きすさぶ嵐を受け
つたう涙は瞬く間に乾く
蒼い銀河は何故こうも紅いの？
戦火の炎と勇者の鮮血に染まり
人々は安寧を求めて
幸福のために人を殺す
剣戟の下の儚い平和を望んで
優しさに血塗られる剣
心を割く自分自身の剣
優しさを忘れないとつらいけれど
For wish剣をとり　優しさの十字架かかげ
For wish鎧まとい　慈愛の祈りささげて
I become a VALKYRIE for peace.

ミキ・ナカサト

私は戦場を駆ける。そう、ただの兵士として。私には戦争に対する大きな理想なんてない。目の前の現実、そこで起こる人の生き死に。戦争では多くの人が死んでいってしまう。当然といえば当然。私も多くの人を殺してきた。私はただの女の子をやりたくはない。だって、私の知らないところで多くの人が死んでいるくらいなら、自分のフィールドで人が死んでいるほうがいい。それに、知らないうちに殺されてしまう民間人になるくらいなら、いつ殺されるか分かる戦士であるほうがいい。私はそういうヒト。それに、戦争に対する理想はなくても道徳はある。道徳のない軍隊の行動は阻止したい。だからといってできることは戦場を駆け抜けることだけ。でもやらないよりはいい。倒す人が不幸になっても、きっと幸福になる人もいる。悲しいかもしれないけど、それが現実。一方では幸せな人が居て、一方では不幸になる人が居る。私は目に見える現実、せめて目に見える人の幸福は守ってあげたい。私には幸いパイロットの才能も、尉官としての采配もある。軍人はある意味天職。多くの敵を倒し、目の前の幸福を守る。血で贖う幸福だけどそれが人類の歴史。私は戦場を駆け抜ける。それで良い。それが良い。血で羽根を染め、戦士を冥界へ導く天使。その後ろに幸福というものを抱えて。

『戦場の旋風』

whirlwind. 駆け抜けてゆく
朝焼けの草原を きらめかせて
黎明の朝凪に戸惑い
薄闇の夕凪は憂鬱で
でもさ
風はいつか生まれるんだ
鳥は羽に風を受け
種は風に運ばれて
巨木を倒すこともあるけど
でも、風は命を育むから
私は whirlwind.
戦場を駆け抜けて
きっと明日を得る

カスミ・イセサキ

私は何故戦争をするかわからないままア戦場にいる。唯一ついえることは、私が殺さなくても人は死んでいくと言うことだ。そして、武器を持たなければ誰かに運命を握られる。それは嫌。私は絵を描きたいけど、戦争もする。こんな世界で悠長に絵を書いていることだけをするのはなんか違う。そういう点はミキさんに近いかもしれない。けど、私は彼女ほど割り切れないし、軍人としてはあまり適当ではない。私には力がある。だから戦場に立つ。たったそれだけだけど、それは大きな意味があると思う。間違っているかもしれないけれど、今はそれだけ。私は感じたことを信じる。

『朧月』

常闇に月光
わずかな影
希望？夢？
けど・・・
決して闇を砕くことなく
・・・・・・
不意に
空は霞みたち
月は淡く
朧なる
天覆う滴
袖は湿るけど
無数の白珠
無数の月華
享けては描く
白き夜

ドレン・フルーレ
何で戦争してるか？食うためだ。いまは妻を養うために軍人をやる。それに血がたぎる。戦場のにおいを忘れられない。あの血のにおい。何故だ？俺はそういう人間なんだろうさ。武人と言うか野獣と言うか。もっとも、そんなに殺伐とはしちゃあいない。なんというか、そこに、戦場にいることが正常なのだ。そうとしかいえない。戦場で MSを駆ってこそ、俺の真価がある。きっとそうだ。

『人喰い天馬』

邪悪の血より生まれて
たぎりたつ俺の血潮
天空を駆け 雷撃を運び
人肉を喰らい 蹄にかける
それが天馬ペガサス
俺のパーソナルエンブレム
荒馬のように戦場を駆け
人の血しぶき浴びて生きる
雷を敵に降り注ぎ砕く
邪悪だがその純白の姿に
戦場に生きる俺を映して

ドメス・ロウゾ
私は、別に戦場にいたいわけではない。けれど戦場しか知らない。それに、愛する人が戦場にいるから、愛する人を少しでも助けたい。風のようなあの人の背中を守り、その行く手の敵を狙撃する。そして、敵を狩る彼女の姿に魅せられる。ただそれだけ。けれどそれは充実の一時。因果なものです。私はまた敵を狩ることでも満足を覚える。先祖はもと狩猟民族です。その血を引いているのだろうか。戦場にいることに意味は無い。けれど、充実のときがここにあるのだ。

『destiny of sniper』

小さく息を吸い
トリガーを引く
一瞬の静寂 消え去る鼓動
Can't cly それが現実
Need tears それは夢想
Go to heaven それだけが贈れる言葉
地獄の業火は 獲物に刺さる
撃ったこの手は 血には染まらず
弾丸のみが 真紅に染まる
なぜか虚しいこんなにも
狩人の本能を満たせないまま
Destiny of sniper

メールシュトローム作戦

「しかし、ブラック。」
「かまわん。今はアクシズにつくべきではない。我らはこのままエゥーゴとして戦列に加わる。そうハマーンに伝えてくれ。」
「判った。」
すでに三つ巴の戦闘である。かといって、アクシズにつけるほどの戦況ではない。寝返るにはアクシズの戦力は少なすぎるのだ。それに、アクシズ側でない旗下の艦艇が三隻である。二対三ではいささか不利である。
「マキタ、どう出る？」
「僕はパプテマス・シロッコを叩くべきだと・・・。この空域での諸悪の根源は彼と、ハマーン・カーンだからね。そう感じるんだ。」
「・・・そうだな。同感だ。しかし反面、ティターンズ本隊が手薄だ。アーガマは根源をひきつける。本隊を討つ。」
「俺はブラックに賛成だ。マキタ少佐、戦闘の経過を見てくれ。」
イシガヤの差し出すデータを覗く。戦闘開始わずかであるが、ほんのわずかにアーガマを中心とした戦闘隊形が構築されていくのが伺える。
「・・・アーガマ。不思議な船だ。我らは彼らを囮として周囲の敵を殲滅する。」
「しかし根源は？」
もっともである。枝葉をいくら討った所で根が残っている限り悲劇は繰り返されるのが宿命なのだ。
「・・・アーガマは強い。一命を賭して討ってくれるだろう。また、効率的ではないが、仮にパプテマスが生き残っても残存兵力が少なければどうにもなるまい。後は政治で片をつければ良い。それはイシガヤやマキタがやるべきことだが。」
「ちなみに、今計算させたが、パプテマス攻撃に向かった場合の戦果を基準値１００とすると、そのときの損害は１７８で、周囲を攻撃する場合は戦果が８４、損害は６５だ。」
「ふむ。戦争は最終経済という。兵は国の大事、死生の地、存亡の時、察せざるべからず。本来は政治で片をつけるべきものだ。効率から考えても周囲攻撃へ向かう。全艦攻撃準備。」
ブラック・ストーム隊はまさにエゥーゴ屈指の艦隊である。その名声は低くとも、兵の質ではアーガマ隊に優る。胡散臭い指揮官が司令とはいえ一度戦場に出れば周囲の艦を巻き込み、敵を粉塵に帰すのだ。
「こちらサラミス艦エクスカリバー艦長アーサー中佐。スター大佐、貴官に従いたい。」
「我はコロンブス補給艦サガルマータ艦長アーネスト少佐。作戦指示を。」
ブラックの旗の下に従うべく指示を求める艦艇はすでに５隻である。それだけ彼の艦隊は粛々として陣を組み、かつその勇壮さは群を抜く。それは決して艦の美しさではなく、いわゆるオーラというべきものかもしれない。名将の下に人が参ずるのは古来そういったものがあるからであろう。
「諸艦に告ぐ。補給艦サルガマータとキプロスは作戦宙域周辺に待機せよ。今作戦で敵が補給艦を狙うことはまずない。それだけの戦力がないからだ。各数機のＭＳで守備すれば足りるだろう。残り四隻、一番艦から四番艦は我に続け。陣は鋒矢。それ以外のエクスカリバー、ホウライ、ペルソナ艦長にはは申し訳ないがマキタの秋雨に従え。貴官らの才覚がいまだ知らず、されどマキタ艦艦長代理イリーナ大尉の才覚は確かである。大尉と侮らず指揮に従ってもらいたい。」

「イリーナですわ。不肖ながら、戦場往来二十四度、一度も不覚を取ったことはありません。ですが若輩ですので、どうぞご教授くださいまし。」
そうして多少の儀礼を終え、戦術展開に移る。今回は、どんな犠牲を払っても、なるべく早くコロニーレーザーを奪取しなければならない。それはエゥーゴにとってもアクシズにとっても至上命題である。ブラックにしてみても、ティターンズがそれを握っているより、エゥーゴがそれを握っていたほうがましである。なぜならば、エゥーゴには旧ジオンが多いため、容易にアクシズへ発射することは出来ないからである。で、あるならば、全力でティターンズを撃破することは、両軍にとって有意義である。
「良いか、・・・この一戦がターニングポイントである。我が旗に集まりしエゥーゴ諸兵よ、まずはティターンズに攻撃を集中せよ。今こそ内患を伐つべし。各小隊ごとに斜陣を組み、ひたすらに戦場を駆け、正面の敵にのみ攻撃せよ。後ろ備えは別小隊が続き駆けよ。自隊が潰れれば近くの小隊長に続け。『数行の過雁』行けや兵ども！」
高機動戦闘である。乱戦ともなればこの数程度のＭＳでまともな戦術など取れない。が、その場合はひたすら戦場を駆け抜けて、止まらず、目端の利く少隊長達に続くのが生き残り、功名を上げるの最上手段である。
「・・・ナカサトは天宮の小隊を受け持て。」
ブラックの手勢は有能である。派遣指揮官に即座に従う訓練だけは、他の諸兵を圧倒しているからだ。故に、自軍指揮官が討たれても、副長格が指揮官代わるか、即別隊に従い再編成ができる。これは、乱戦には著しく有利である。
「・・・『霜満軍営秋気清　数行過雁月三更　越山併得能州景　遮莫家郷憶遠征』」
ブラックは、上杉謙信の作と伝わる漢詩を口にする。
「大佐、用意完了しました。」
「士官パイロットに告ぐ。旗を揚げよ！」
一斉に個人章旗が掲げられる様は壮観である。兵はそれを頼りに乱戦を駆けるのだ。
「滅せよ！」

レッドが先陣を駆ける。それに三機を従えて。その赤き閃光はまさに楔となる。瞬く間に敵のカーテンを斬り破り、穿ち貫く。しかしそれは前奏曲に過ぎない。如何に強いとて。その閃光の中、ドレン・ミキなる宇宙駆ける天馬、旋風羽に受く鳳を従えて、有翼の巨人を駆りて堕天使の異名とるマキタと旗下の隊が、閃光の穿ちを押し広げ、瞬く間に無数の敵を裁く。血肉はクリアの戦乙女達に洗礼に砕かれ、勇者達の魂は天界へと誘わる。そして、しかし生きる勇者達は、虚空の空の蒼い城壁ブルーに妨げられ、逝く。再び還らず。死者となりて・・・。
「・・・艦隊雁行。イリーナ大尉、先陣を駆けよ！」
「承りましたわ！皆さんよろしくて？突撃開始！我に続け！」
鋒矢気味の雁行である。艦隊において突撃戦最強の彼女を先手にしてこそ美しい。これに漣以下諸艦が続く。魂の華は咲き乱れ、くぐり抜けゆく巨大な鉄塊。砲は雷鳴轟くばかりに、地獄へ誘い火炎噴く。静寂の宇宙にありながら、なお。イリーナの鳥海はすでに宇宙の楽譜に舞う音符なのだ。
「さらに敵部隊接近！」
「・・・薙払え！」
損害など気にする余地はない。コロニーレーザーを奪取せねば、幾億の人々の命が舞い散りうるのだ。
「天宮、エクスカリバー轟沈！第１０ＭＳ小隊壊滅！」
散華舞う。

「・・・ん。漣も全面に押し出せ。我が艦も続く。」
　彼が気にするのは火力のみである。今はそれだけで良い。他はライが処理している。
　「・・・全艦に告ぐ。ミサイルの出し惜しみをするな。今が撃ち時である。何事にも構わず攻めよ！」
　「しかし、敵の攻撃が・・・」
　通信からウッドガルド艦長ノックス少佐の声が漏れる。
　「・・・聴け、汝等は大の男なるに、眼前のイリーナ大尉の誉を知らぬか。また聴け、この程度激しいうちに入らぬ。」
　確かに一年戦争に比べればそうであろう。
　「・・・漣はなにをしておるか！」
　「！？・・・申し訳ありません！更なる突撃を開始します！」
　ブラックの命令の異常を悟る。自分の艦隊だけなら物静かに采配を振るのだが、今は混然とした艦隊である。物静かは臆病者と侮られないとも限らないのだ。それゆえの演技である。そしてまた、漣に激怒し突撃命令を出すのにも重大な意味がある。この状況に置いて他者を動かすには、身内を叱り、最前線に放り込むことが有効なのだ。
「イリーナ大尉に遅れをとるな！当艦はこれより最大戦速、鳥海の左１０に付けよ！シノン、この際広範囲索敵はいい、漣の侵攻方向への分析に集中！チカゲ、各艦に伝達、索敵は俺らに頼るな！各砲座全力射撃！主砲は前方に集中！横など周りに任せよ！ミサイル水平扇撃ち！三番、六番は散弾放てぃ！」
　「正面敵ＭＳ！」
　「人形はカスミに任せた！はよぅはよぅ！ひたすらに侵略せよ！」
　「・・・漣に遅れるな。ライ、出撃せよ。火力が必要である。８番隊と６番隊がすくんでいる。・・・前線に叩き込め。」
　「了解しました。」
　ライはブラックのハイザックに乗り込む。漆黒のサイクロプス。宇宙の深淵に溶け、ただ一つ紅い瞳、そして、弦月の黄金の角飾りが、闇を裂く星屑の如くに。ただ星屑程の淡き光を放って。
　「諸兵、８、６番隊は私が指揮を執ります。方陣を組みなさい。我々が本軍となります。
　四方の雁の拠り所になりつつ、突撃をする！」
　「はっ！」
　今、すくむ兵は旗掲げる士官に続けばいい。そういう戦だ。旗持ちは勇者である。それは現に示されているのだ。故に、彼も方陣の前方に位置しなければならない。
　「・・・ドメス、ライの援護に回れ。艦の直援はよい。」
これで勇者が二人。すくんでいた者たちは羽を得たかのように宇宙を翔る。
　「・・・状況は？」
　「友軍がコロニーにとりつき始めました。」
　「・・・展開図を。」
　漣から状況がかなり詳細に伝えられる。戦技に必要な情報はかなりカットしたとはいえ、戦略・戦術に必要な戦場全体の情報収集は、専属の者が常にやっている。本来は旗艦にあるべきものだが、彼らはブラックの部下ではないため、それは出来ない。とはいえ、それなりのものは如月にもあるが、設備が違いすぎる。
「・・・なる程。鳥海、漣進軍を押さえよ。これより艦隊を再編し、第二幕に備える。後退は漣を先にし、鳥海が後となれ。」
前後を良将で固めて後退させる。戦場での戦術的後退は、よほどの采配がないと壊乱する。しかし、良将で弱将を挟み込んでしまえばそれを防ぎやすかろう。ことさら両者は猛きか

ら、逃げようものなら容赦なく撃つとわかる。
　「何故後退を？」
　「・・・すでにコロニーの奪取は可能と決まった。布陣その他でわかる。我々は戦場の端によりて補給艦隊の守備をしつつ、奪還に向かうティターンズの横腹を突ける位置につく。」
　これはいえないが、アクシズの動き次第で重要な補給艦隊を奪取あるいは破壊し、アクシズ艦隊と連動して消耗したエゥーゴ艦隊を討つ為だ。故に、艦隊前列に味方にはならないだろう艦を配置し、後方に味方にしうる艦を配置す。ＭＳも同様に。造反の際は、後ろから純然としたエゥーゴという敵対分子を蹂躙するために。

最終決戦前

　エゥーゴ本隊からの通信を受けた。
　「・・・コロニーレーザーの守備か。」
　「どうします？我々の艦隊は後ろ巻きとしてこのまま敵の退路を断ちますか？」
　「・・・そうしよう。しばし用がある。艦隊指揮は任せた。」
　「了解。」
　エゥーゴがコロニーレーザーを持っているのはつらいが、ここでティターンズを壊滅させるのは得策だ。その後で自分の艦隊をエゥーゴに造反させ、ハマーンがある限りの戦力を投入すれば、エゥーゴにも致命傷を与えることが出来よう。うまく立ち回ったため、現状、エゥーゴ戦闘輸送艦の４割の運命が、こちらの手にあるのだ。輸送艦を潰してしまえば、補給ルートが減少する。致命的だ。潰すことは造作無い。彼らは、味方旗艦の造反など考えてもいないからだ。不意を突ける。加えて言えば、一度撃ったコロニーレーザーは脅威ではない。冷却充填に時間がかかるからだ。しかも、造反直後にイシガヤあたりにでも攻撃させれば、使用不可能になるだろう。
　「・・・イシガヤ、鳥海は任す。」
　「ん？」
　「大義のことだ。マキタはこの戦線に集中させよ。」
　手勢の中で、最大限の注意を払わねばならないのが鳥海である。その兵力は凄まじく、下手に造反すれば、如月・漣両艦は大打撃を蒙るだろう。

　「ミネバ妃殿下、この非常時に宰相はどこにいかれましたか？」
　「ハマーンか？ハマーンは出撃したぞ。」
　「なんと。では妃殿下、コロニーレーザーにこちらを撃つ動きがありますれば、主要艦艇は撤退の準備を行ないください。また、ノーマルスーツの準備も怠りなきよう。それと、勝機と観たら全軍を投入する準備は怠りなきよう。この一戦はアクシズにとってもターニングポイントになりえます」
　「うん、分かった。そこの者、各艦長にそう伝えよ。ブラックはこのまま指揮を執ってくれるのか？」
　「・・・いいえ。・・・行いたいとは思いますが・・・。じきに宰相がご到着なさると思いましますれば、指揮は宰相にお任せしたく。私はエゥーゴに侵入している身、すぐに戻りませんと。」
　ミネバの信任も厚い以上、ここで指揮系を乗っ取りアクシズ全軍を指揮したいところであるが、しかしそれをすればハマーンと雌雄を決せねばならない。戦場で勝つ自信はあるが、政治の能力が著しく欠ける自分であり、手勢にも連邦政府から独立を果たせるほどの政治家もいない。ゆえに、ここはハマーンに任せ自分は将校として身を保つのが上策と判断した彼である。
　「ミネバ妃殿下、ハマーン宰相にくれぐれもお伝えください。宰相が艦隊指揮を執られておれば、ここで艦艇を押し出しティターンズ、エゥーゴを駆逐できます。我らニ隻とはいえ、艦隊の一隻は味方に誘える上にティターンズ対エゥーゴの戦場のキーポイントに陣しております。加えてエゥーゴの補給艦隊を虜にする位置にあるのです。」
　「わかった。ブラックも出撃してきたようだが良いのか？」
　「はっ、私には実に有能な部下がおりますれば、今私が戦死しようとも当面の作戦になんら支障はありませんので。」

ミネバはブラックの心情を汲みつつハマーンを擁護する。後十年も育てれば仁徳は充分になろう。正直、惜しいのである。十年ハマーンから政治、自分から軍事を学べばギレン・ザビを優に上回る名君となろうものをと。まさに仁義礼智信の一切が欠ける事が無い。万が一この戦いでハマーンが討たれ、あるいはミネバの身に何かあれば多大な損失である。特に、ハマーンの冷たさは、ミネバの若干温かすぎる性格を良く抑えるのに役立つであろうから。
「ブラック、戦死などと悲しいことを言わないで欲しい。お前にはずっと私を支えて欲しい。」
「はっ、ありがたきお言葉かたじけなく。」
「ミネバ様は居られるか！」
ブラックが退出しようとしたところハマーンが現れる。
「・・・宰相、この作戦アクシズにとってもターニングポイントであります。」
「何故か？」
着席したハマーンが言う。ハマーンはそうは思っていない。今ある戦力は微々たるものである。まだ後方には大戦力があるのだ。それを得てからで充分であり、いまはエゥーゴとティターンズを消耗させればよいと。しかしブラックは違う。
「・・・この度は十中八九エゥーゴの勝利となります。ですから、消耗したエゥーゴを今叩き潰す必要があるのです。」
「だが、兵数的に消耗したエゥーゴと現状の我が手勢に差は無かろう。」
「・・・さようです。合戦すればこの旗艦さえもただでは済みますまい。しかしながら、今敵の主要艦総てを決定的に潰してしまえば、彼らの立ち直りは遅くなります。またアクシズは、今から派遣を始めれば１ヶ月で大戦力を確保できます。これが後々効いてきましょう。見逃せば、破損した艦艇を修理されます。」
「それにどれほどの意味がある？」
「２ヶ月あまり敵の先手を取り続けられるでしょう。加え、現状私は補給艦隊を旗下に従えております。叩き潰すも略奪するも容易なのです。」
物資としてはそれ程の量ではない。地球圏の軍であれば。しかし、火星からの遠征軍であるアクシズにとっては大した量の物資である。火星圏から同じ量を運ぶのは難儀なのだ。
「ふ～む。」
「・・・よくよくご決断ください。私はすぐに戻らねばなりませんので。」
そういい残しブラックは退席する。

「参謀長、どうだ？」
「そうですね・・・アクシズが今出てきた場合、当社は幾らかの損失を得るでしょう。売り上げの５％程でしょうか。月まで制圧されれば消費需要は抑えられるはずです。」
「そうだな。５％か。戦争は非経済だぁ。」
「軍需品は少ないですからね。」
「そんなもん大々的に作ったら、そこら中から袋叩きに合う。地盤緩いしな。それに軍需品は戦争なきゃ売れないし。」
「いかがします？」
「まだまだ様子見だな。このままなら戦争は長くは無いだろう。ハマーンがブラックでも将軍にしたら話は別だが・・・。」
「経営難に陥るほどではないですが。」
「きっと投資の時期だ。戦争で経営難に陥った一般企業を購入しておく必要がある。個人的には玩具メーカーやエンターテイメント系業界を充実させておきたい。戦争後は人間

平和ボケしなければならん。」
かなり赤字気味だが、まだ借入金が無い分何とかなる。かつてのキシリア少将の遺産がものをいう。それを資本に繰り入れ、（無駄に）借入金を全て排除出来たからだ。
「不動産系は？」
戦後復興では、住居は需要が多くなる。
「それより建築業界だ。建築技術者も充実させとけ。」
ともかく手広いが、しかし一つの延長である。ソフトウェア、精密機械技術を生かしゲーム機の受注生産を行ったりソフトウェアを生産したりする。大型作業機械技術を使い、建築作業をするなど応用は効く。民間から徴収された旧ジオン兵を相当数匿ったからだ。出来ればコロニーを作りたいものだが。とりあえずの方針は、戦後に備えて建築とエンターテイメントに設備投資額を上げ、輸送艦艇や準ＭＳの生産を抑えることだ。戦争復興中に大金は動きにくくなろうから。
「艦長、当艦の修理作業、終了しました。」
「ん。そいじゃぁ如月と鳥海の手伝いに回れ。この一戦が終わればいずれにせよ休む間がある。今は厳しいが頼むぞ。」
「了解。」
「チカゲ、グラナダへ長距離通信を頼む。」
「はい。」
「艦艇修理要員を高速艇にのせ発進せよ。資材は最低二隻分必要だ。また、交戦後の人員引き上げの為、赤十字を掲げた輸送艦艇を出せ。二隻出せるはずだ。」
「通信完了。」
「ライ、これでいいか？」
「まぁいいでしょう。」
「よし、では漣からの指揮はクリアに任せる。俺は修理班に混ざるからな。」
「了解しました～。」
「それにしても・・・」
「どうかなさいました～？」
「いえ、八隻中三隻沈みました。しかし漣はなんて損害が低いのだろうと。」
「不思議ですね～。」
そう、例によって漣の損傷は見た目より少なく、死者もいない。が、他はそうはいかないのた。ブラック直属の軍では戦死者　678 名、負傷者数知れずの状況だ。ライが思うところ、次の一戦でまた　500 人ほど死ぬだろう。自分達がその中に入らないとも限らない。しかし、そんなことを気にしていれば指揮官などやっていられない。
「まだ一週間は余裕はあるでしょう。各艦艇の修理は確実に行いなさい。馬防柵を作りましょうか？」
「そうですね～。それよりは～投石機の方が～いいと思いますよ～。馬防柵は守備に集中して～機動に欠けますから～。戦術的には～投石したのち～機動戦に移っては～？」
ライは一考する。ブラックはアクシズ寄りであり、徹底的にコロニーレーザーを守備する必要はない。かといって、動いておけば、何かの疑惑も免れ得る。エゥーゴにも相応の諜報力はあるのだ。
「フォスター技師長～、カタパルト（投石機）が欲しいんですよ～。」
「作れやす。ゴミを打ち出しゃいいんすよね？一週間で簡単な２基、二週間で強力な５基。それで資材は尽きやす。」
「だ、そうです～。私は後者で良いかと～。２週間は来ないと思いますよ～。」
やはり相手も再編成する時間が必要なのだ。布陣図を観る限り、今攻め来たところでテ

ィターンズはエゥーゴに勝ちようがない。互角以上にするには２週間はかかる。こと、ティターンズは指令系が乱れているからだ。シロッコの台頭が著しい。ただ、彼が出てきたせいでティターンズの統率は弱まり、かつ彼の政治カリスマは著しいが、軍事の采配や知略はさしたる事もない。せいぜいクリアやライと互角だ。
「そうですか。よし、フォスター技師長早急に強力なカタパルトを作りたまえ。ただし、艦艇及びＭＳ修理が優先である。」
「了解っす。」
実際、カタパルトそのものは簡単といえば簡単だ。宇宙空間であるから、充分な初速を与えてゴミを打ち出すだけで充分破壊力が出るのである。大きなパチンコを作ると思えばいい。
「しかし・・・」
問題はしばらくする事がないと言うことだ。防衛任務が下っているため動くわけにもいかない。それに、ブラック・ドメス・ミキの三将もアクシズへの報告に向かって留守である。イシガヤが言うには良いもん食って寝てるしかないというが、確かに戦闘員はそうするしかないようだ。

最終決戦

　ライたちの苦心により、何とか士気は保たれた。パーティーや模擬戦闘、訓練などを連日行ったためである。
　「・・・右翼カタパルトは漣に任す。よくよく引きつけよ。残艦は我に続け。隕石ダミーを使うよう。ダミーに勝敗はかかる。」
　その戦術は漣と艦艇ダミー、カタパルトにより主力艦隊と見せかけ、敵を引きつける。この間にブラックの主力は隕石ダミーに隠れ、敵の側面を急撃するのだ。そして、敵は戦場の外郭を流れる隕石よりコロニーレーザーを明らかに狙うだろう。側面を気にしても漣の位置程度までで、こちらまでは気は回るまい。加えていうには、この作戦は、漣一隻で10分は支えなければ意味がない。彼の計算上、支えきれる確率は９割。もし撃沈されたならば、後ればせながら敵後方を狙うことになる。また、万一敵がこちらに兵を向けた場合である。通常ならば、５隻も裂くことは無い以上互角には戦える。直接的には４対５になっても、漣からのカタパルトによる援護があるからだ。また、漣もしばらくすれば参戦可能である。或いは大軍を向けるかもしれない。その場合はなるべく長く支えていれば、エゥーゴ本軍がその側面を突けるので本質的な勝機は充分ある。また、敵が寡兵を漣と如月艦隊に分散して向けた場合だが、漣は撃沈されるおそれがあるが、全体的には勝利できる。残るは敵がこちらを上回る奇策を練った場合だが、その際は迷わず敵中央突破をはかるしかない。艦隊の被害は増大するだろうが、敵に混乱をもたらすことが可能だからだ。

　「敵はコロニーレーザーに取りかかります！」
　「・・・各機発進用意。艦隊はライに任す。」
　「了解。」
　黒い竜巻が戦場に吹き荒ぶ。
　「漣がカタパルトより砲戦はじめました。」
　「わかりました。イリーナ大尉、この度は後ろ備えを任せます。」
　「承りましたわ。」
　鳥海を先陣として突撃させてもいいが、まず滄海とコヨーテを前面に出し、如月が後を受ける形で衡軛に陣し、敵艦隊とぶつかった後、機をみて後方から迂回した鳥海による背面攻撃を行う予定だ。
　「進軍せよ！」
　ライが采配を降る。一度にダミーを割りて、巨大な艦艇が姿をみせる。
　「速度８０％。敵が漣と交戦中にかかります。」
　が、五分は交戦できまい。

　「コヨーテ被弾！」
　「ん！？どこから！」
　「不明！」
　「・・・どうした。」
　格納庫からブラックが通信をいれる。
　「コヨーテが被弾しました。敵不明。」
　「方向は？」
　「おそらく後ろです。」
　「・・・。ドメス発進せよ。私も出る。」

二機がすぐさま発進する。
「・・・マキタ、ＮＴを発進させよ。」
「何事です？」
「発進だ。カメラはアニメ映像カット。」
先ず、マキタはレッドとウェポンを従えて発進する。理由を説明する暇が無いらしい。現に、虚空に向かってドメスが発砲している。強力なスナイパーである彼のモニターは常にアニメカット状態なのだ。
「艦はしばらく対空放火。小型宇宙潜水艦二隻とＭＳ二個小隊である。・・・ここは我らで押さえる。行け。」
漣が敵の多くを引きつけているのだ。この機を逃すわけにもいかない。これ以上戦力的に兵を裂くのは厳しいが、相手は潜水艦である。そもそも、宇宙潜水艦など見たことがないが、現にある。今これに対峙するには、アニメ映像を使わずカメラで直接見なければならないが、平凡なパイロットには難しい。戦場の恐怖が増大されてしまうからだ。加えて、敵はステルス機。確実に高機動戦闘用であろうから、平凡なパイロットでは勝つ術もない。ライも察し理解したのだろう、即座に進撃を再開する。
「・・・どうか？」
「ブラックさん、敵は早いですよ。練度も高いですし。」
「これを使え。」
マシンガンをドメスに渡す。高機動機にスナイパーライフルは厳しい。緊急発進だったため切り替える時間が無かったからだ。ブラックのザクマシンガンをもらった直後、一機撃墜する。
「・・・散れ。」
ブラックが多連装ミサイルを放つ。今使うにはもったいないが、一刻を争う。一機と一隻を沈めた。
「確かに他の練度は高いな。」
敵は高機動戦になれている。技能はともかく、ブラックとドメス、ウェポンの機体では敵の機動性に追いつけない。
「あと４機！僕とレッドが敵ＭＳとやる！」
「許可する。支援する。・・・ドメス、ウェポンを率い潜水艦を討て。」
「了解。」
支援なくばマキタもつらかろう。敵の機動性を凌駕しているのは唯一レッド機だけなのだ。加えて２対４では厳しい。

「・・・よし。このまま如月に戻らん。続け。」
ブラックが指示する。ウェポン機が撃墜され、マキタ・レッド両機が小破したが全員命は無事である。

「さてもさても。」
「三番カタパルト沈黙。」
「カタパルトなど機械に任せとけ。」
「機雷散布しますか？」
「却下。しかし・・・」
「艦長は出撃しないでくださいね！」
「ぬっ！む～。」
椅子を立ちかけたイシガヤは文句を言われる。はっきりいって暇だ。正面モニターには

敵の放つビームやミサイルが映り、障害物などを溶かし、光を生んでいる。が、あまりに暇だ。投石機はコンピューター自動制御であるし、艦の砲手にいちいち命令する必要も今はない。こういう際艦長は、部下のモチベーションを下げないようにどっしり席に座っていればいいのだが、せっかちで好戦的な彼はウズウズしてたまらない。かといって搭載ＭＳは全て出撃中である。砲戦では彼より部下の方が巧みなのだ。
「もののふは　何を想いて　興じるか　千代と八千代と　止まぬ戦に・・・巧くないなぁ」
この状況で歌など作っている艦長に驚愕する者がなお数名。今近くの隕石にミサイルが直撃したばかりである。が、少なくとも、臆したのではと不審の念を持つ者はいない。艦隊では霞むとて武名があるからだ。
「アリア少尉、その楯に移りなさい。散開します。」
「了解。」
「カスミ中尉は中央下を。私が中央上を。ミキ中尉は後方で残機を率いバズーカ用意。」
このバズーカは使い捨てである。そしてミキは撃沈した天宮の残存ＭＳを暫定的に指揮している。あくまでも漣所属ではない。
「シノン敵数は？」
ミキの質問に、彼女はイシガヤを見る。実数を言うべきか悩んだのだ。反応は『言え』である。
「４２機です。内２０は少なくとも砲戦使用。」
「了解。」
予定より多いが、クリアに動揺はない。そう、余りに敵が多い場合、うっかり実数を言うと逃亡者が出たり、士気が低下しかねない。しかし、クリアがその程度で士気を下げないと、シノンは確信出来なかっのだ。しかし、イシガヤは自分・クリア・ミキ・カスミはその程度で士気が下がらないと確信している。
「予定の二倍近くか。楽しくなってきた。如月は予定通りな？」
「だいたいは。」
連絡はつかないが、光点は確実に近づいているのだろう。しかし敵は気付くまい。漣には高価な観測システムがあるからこそわかるのである。その分攻撃力は低いが。
「よし。クリア、散開し過ぎだ。偃月にせよ。カタパルトは最後に捨てて敵中突破で退却する。」
「前に向かって！？」
「反転して遅れたり、無数にＭＳがたかってきたりしたら払い切れまい。」
「危険すぎます。」
「知ってる。が、後ろに逃げても埒があかない。前へ逃げる！漣の対空放火を前面に集中し、鋒矢で突っ込めばまずいい。また、敵はカタパルトを破壊した時点で図に乗ってくる。こっちが圧倒的不利だしな。しかし、その気のゆるみがあればなお容易。」
・・・はっきり言って容易ではない。間違っても容易ではないことだ。が、一つ言えるのは散開しても大きな効果はなく、誘爆させない程度の意味しかないのはわかっている。馬防柵や大楯を事前に準備していなかったからだ。
「幸いしてこうだ。ダミー隕石が多数ある。触れば割れる代物で機雷もついてない。敵が接近したらこいつを前方へ盛大にばらまけ。艦からも大量放出する。お前ならどう思う？」
「一見撤退するだけに見えますが、しかし、攻撃のつもりとも伺えます。しかしながら、異常な数のダミー隕石を前方に差し向けるのは、通常攻撃に移る手段ですから、やはり攻撃に見せかけた撤退だと判断するでしょう。また、攻撃に移っても私たちに勝機は無いの

ですから。」
　「孫子にも似た記述があったな。この状況で攻撃的な多いダミー隕石は撤退と読む可能性が高い。私は無論撤退する。が、流石に敵は自分たちに向かって撤退するとは考え難いだろう。常識はずれだからな。だから前に撤退するのだ！安心せよ、島津維新はもっと不利な状況でやって見せた。」
　イシガヤの言うのは、関ヶ原の戦いで敵に向かって撤退した島津義弘のことをさす。また、これはクリアに言っているわけではない。先例があることで大言壮語するためだ。しかし大半の人間はこの事例を知っているわけがない。そう、どれだけ損害が出たかを。クリアはその歴史事項を知っているが、実際、後ろに逃げても前に逃げてもこの戦力差では大差ない。前に撤退した方が、後ろに撤退するより士気の低下を起こさないことを考えれば良いかもしれない。ただし、それは味方勝利のためであり、手勢が損害を受けても士気を落とさないためだ。手勢の兵卒の命をより多く守るには後ろに撤退させた方がいいのだが・・・。下手にそれをやればエゥーゴ全軍が壊乱しないとも限らない。
　「・・・わかりました。全機偃月陣。敵をよく引きつけよ！」
　クリアが号令を下す。まだ退却することは伝えない。言わば浮き足立つ兵がいるのだ。人は命の危機からの逃亡の誘惑には抗しがたいものである。
　「ミキさん？」
　「ん？鶴翼じゃないってことは・・・徹底的に守備して玉砕するか、敵中突破よね。」
　「間違いなく後者ね。」
　「だよね～。あの少尉が黙って玉砕するわけないし。んじゃぁまぁ頑張りますか！」
　カスミとミキの二将がお肌の触れ合い回線で話す。付き合いが長い分次の手が読める。時々心配になるくらいにだ。しかしまぁ、クリアという知謀の副将もいるし、君命も受けざるところありならば、戦術的にはミキも充分な知謀で問題を解決できる。カスミも同様だ。暫定的に彼が指揮官でもさして問題はない。
　「友軍ＭＳ有効射程圏まで後３０秒。」
　「艦砲正面一斉射撃！水平角－２上下角－１！・・・・・・・てっ～！」
　漣の砲撃を皮切りにＭＳ隊による全力射撃が開始される。当然ながら最前列にあるカタパルトは被害が拡大していく。
　「敵は散開したかっ！主砲は敵艦艇にむけぃ！」
楯にしているアステロイドに数条の閃光が突き刺さる。保つのは１０分がせいぜいだ。
　「たっのしいなっ！」
　「カタパルト一基沈黙。」
「自爆装置作動させて前方に押し流せ！に、しても。カスミ、ガトリングの照準が甘い！敵はもっと手っ取り早く殺せ！コクピット狙えよ、てめぇら！ミキはまだ抑えてろ。」

　「残艦４、残機１５。大佐が帰還するのは早くて２０分後。衡軛を堅持！」
　とはいえ、若干隊列が乱れている。コヨーテは急遽編成された艦であり、鳥海や滄海のように元からライの指揮に従うことを知らないのだ。彼は大尉であり、コヨーテ艦長は少佐である。滄海のムラカミ少佐や鳥海のマキタ少佐、同階級のイリーナ大尉やブルー大尉はライの実績を痛感しているので問題はないのだが。そして、指令は旗艦からでるほうが何かと都合がよい。

　「シャロン機大破！パイロット回収しました。ロード機戦闘不能放棄します。アリア機損傷多数。」
　「退きどきか。アリアは漣甲板上で砲戦せよ！ダミー隕石大量射出！各機に連絡、『突撃

せよ！』ミキ隊が突破口を穿て！カスミ・クリアは艦の直援。ＭＳ隊総指揮はミキに移行！よいか！全軍は敵正面に突撃し退却する！」
　ダミーを大量投下した直後、敵は予想通り加速を開始した。ワンテンポ置いて、こちらも正面に向かって退却を開始する。鋒矢陣である。両軍最大加速中となり戦技などほとんど意味がなくなる。そして、その状況に狩人達は驚愕し、隊列を乱し、戦闘判断力を著しく低下させる。これほどの反撃を予測しなかったせいであり、先ほどまで命を奪う側だったものが、今は大きく命の危機にさらされている。対するこちらは、敵を突破すれば現状では玉砕しかない戦況から解放される。自ずと士気が違うのだ。ただし、やはりこの状況で厳密な隊列は保てない。味方は帰心に憑かれているから。

　「ハワード機大破！第二主砲使用不能！アリア機戦闘不能！ラバン機中破帰投しました！」
　「まだまだっ！四方に機雷射出！後一息っ！」
　「正面、如月確認！」
　「気を抜くな！気を抜いて、万一如月が寝返ってたらどうするかっ！ひたすら突破せよっ！」
　「ナカサト機大破！」
　「ミキが！？構うな直進！」
　しかし、非常に気になる事態だ。かといって、今引き返すわけにも行かないのである。
　「如月敵へ発砲開始します。漣敵の射程圏から離脱」
　如月とすれ違う。
　「クリア、帰還せよ。俺が乗り変える。また各機帰還せよ。艦反転、如月後方に付け。カスミ、連戦で悪いが弾薬つめたら如月隊に合流する。」
　「俺は？」
　「ん・・・ヤナセ軍曹か？戦えるなら。撃墜された生存パイロットの回収をせよ。ブースターや回収ボックスを貸す。戦闘圏外からでよい。負傷者優先ではあるが、特にナカサト中尉をな。脱出したことは確認している。あれは優秀な指揮官でありパイロットだ。」
　「了解！」
　流石に反論はしない。激戦をくぐり抜けたせいで、すぐにもう一度戦う気力はないのだ。そして、ミキ優先にも彼は納得できる。自分が幸運にも切り抜けたのは彼女の采配と自分の幸運からだから。ただ最後まで彼女に従っていた自分はまだ戦闘可能で、如月を見たとたん指揮を抜けたハワードは死んだし、ラバンは中破している。そして、彼女の乱戦に置ける判断力は間違いがほとんどなかった。それでいて、敵の四機を戦闘不能にさせている。自分などは生き残るのが精一杯だったのだ。

　「漣より状況連絡。残存敵艦３隻、ＭＳ２４機。また、漣は最後方に陣し、ＭＳ２機を繰り出すそうです。」
　「わかりました。ＭＳ、カタパルトより急速射出！敵が乱れている内に片付ける！」
　戦力はほぼ互角であるが、疲弊した敵と疲弊してない味方ではその質が大きく異なる。また、敵はまだ陣列が乱れたままだ。
　「艦隊全速！衡軛陣のまま敵を撃滅する！各人武名を上げよ！」
　ライが適切に艦隊を突入させたため、敵はたまらず崩れ落ちる。まさに壊乱状態である。この為には常に戦場の呼吸にあわせた対応をしなければならない。すなわち、敵の振り子のような動揺の度合いを感じ、もっとも的確な時に揺さぶりをかけたならより振り子は大きく振れるのである。一瞬早かったり遅かったりしたら、振り子に対し逆ベクトルの力を

加えることになるので、動揺の振り子の振り幅は狭まり、敵は立て直すことになってしまうかも知れない。だからこそ、優秀な指揮官には繊細な芸術家が多いのだ。

「残存兵力は？」
「戦艦如月・巡洋艦漣、鳥海、コヨーテ。ＭＳ１３機。」
「わかりました。大佐の到着を待ちます。」
あの敵を撃破したとはいえ、損害は甚大である。このまま戦場中央に行ったとしても兵の疲弊が多くさしたる戦果はあげられまい。故に司令たるブラックをまち、なお休息が必要である。に、しても、ミキもドレンも撃墜されて負傷したのが痛い。戦力の大幅低下である。

「・・・２０分休憩の後、攻撃を再開する。」
ブラックが全軍に通達する。
「・・・ライ、戦死者は？」
「３２０名。」
「・・・そうか。よくやった。」
戦闘の割に死者数は少ない。たしかにその会話は無機質ではあるが、構っていられないのが現実だ。
「・・・士気はどうか。」
「疲労度は高いですが、士気は下がってはいません。しかし、戦闘指揮官としてドレン、ナカサト両中尉が負傷しましたので、乱戦での士気を保てるか疑問です。」
「・・・私が出撃しよう。艦隊は任す。ＭＳ隊もイシガヤとマキタが出ていれば代用はきく。」
確かに編成に難があるが、１８機だけなら優秀な指揮官が少なくてもどうにかなる。
「・・・魚鱗型に陣する。本陣は３機。ドメスとイセサキを入れる。一陣マキタ隊４機、二陣イシガヤ隊３機、三陣ニッコロ隊４機、四陣ブルー隊４機とする。」
「わかりました。サテライト大尉に通達し、編成を急がせます。」
「・・・アクシズの動きは？」
「ハマーンが動いているようですが、兵力を投入する気はないようです。」
「・・・ふむ。」
やはりでないか・・・。説得に失敗したようである。

「・・・。」
ブラックが圧倒的技量で一機撃墜し、負けじと疾風のごときレッドが敵を駆逐する。
「・・・。」
やはり思うのは、レッドと言う弟の神技の如き技量である。槍先だけで中尉に成り上がっただけあり、ブラックでさえ負ける可能性が高かろう。そして強力なニュータイプである。ニュータイプ、果たして人類の革新なのだろうか？ブラック旗下には数名のニュータイプがいるし、シャア・アズナブルやアムロ・レイ、カミーユ・ビダンなどの者もいる。が、小さな人殺し程度の人物はいても、天下の趨勢を一変させるほとの人物はいない。
「敵三個小隊！ＭＡ１！」
「・・・モビルアーマー？イシガヤ。」
「・・・・・・旧式ビグロタイプかな？シルエット、加速はビグロそのものだ。」
「・・・楽観はできんか。」
どこからか引っ張りだしてきたものを改修したものかも知れない。改修されていれば厄

介であるし、そのままでも対ＭＡ戦は経験がないとつらい。
「・・・マキタ隊はＭＡにあたれ。無陣。各小隊長の指揮に従え。」
難しいところだ。確かにある程度陣型を整えた方がバランスよい攻守が可能である。しかし、陣型を整えれば高機動戦の障害となる。もっとも被害を押さえるには無陣が無難であろう。ただし、各小隊長の指揮能力によって勝敗が決定するのだ。

「キケロ大尉、敵は散開したようです。」
「そのようだな。黒いハイザックが隊長機のようだが、赤いジムやガンダムタイプも強敵だろう。ビグロは赤い奴とガンダムをやれ。強襲をかける！」
「了解。」
キケロは瞬時に敵の強大さを悟る。しかし、友軍が機動性において有利であることは明確である。敵が即座に散開したことでそれがハッキリした。
「揺れが大きいのは右翼だ。一番・二番隊は敵右翼に突撃！三番隊は散開し攪乱せよ。」ニッコロ隊に攻撃を集中する。まさに的確である。

「ちっ！出遅れた！アリアはニッコロ隊への援護！ヤナセ軍曹は俺に続け！」
「了解」
マキタ隊への援護に回る。
「効かない！？」
マキタはビグロに二発直撃させたにも関わらずびくともしないことに驚愕する。敵は強力な対ビームコーティングを装備しているようだ。残念ながら、装備されている実弾兵装ではとても装甲を貫くことさえも出来ない。
「ちまちま撃っても仕方ないだろ！近接だ！」
「そうだね。レッド、先鋒は任せるよ。」
が、近接得意のレッドにも問題がある。先の戦闘で受けた損傷により、出力が２０％減で、量産機なみの加速運動性しか確保できないのだ。と、いうことは、ＭＡに匹敵する機動性を備えた機体は無いことになる。
「ぐわっ！」
「ナット！」
ビグロに旗下のナット軍曹が撃墜される。コクピットを一撃だ。宇宙の肉片と化した。
「よくもやったなっ！」
「くっ！」
「大丈夫か、ブレイク！？」
「なっ、何とか。戦闘不能、退却します。」
ＮＴのブレイク機さえ中破する。
「イシガヤ、足止めできないか！？」
「・・・わかった！一瞬止めてみせるから必ず撃墜してくれ。」
イシガヤ機が囮となる。敵は上手く食いついたようだ。
「ドムぶぜいが！」
イシガヤ機の外装に煽られしゃにむな突撃を行う。無理もない。外装は一年戦争中の機体であり、旧式にしか見えないからだ。
「これで！」
ビグロのアームが迫る！瞬間！
「なっ！」
いきなり視界がホワイトアウトする。ドムの拡散ビーム砲である。そして機体に激震が

続く。近くで大爆発が起きたのだ。
「何が。ぎぁっ！！」
その隙にマキタがとどめを刺し魂散る。
「イシガヤ！生きているか！」
既にドムの機体は無い。あるのは残骸だけである。自爆したのだ。
「死ぬわけないし。回収頼む。」
生きていたようだ。しぶと過ぎる。マキタも巻き添えで戦闘不能であるために帰還する。

「蠅がうるさいですわね！」
「イリーナ艦長、司令より通信。振り払え。だそうです。」
「よろしいですわ！各艦へ通達、我に続け！」
イリーナの目が見開かれ閃く。ブラックの指示は突撃の許可であり、漣、コヨーテ、如月の指揮を任せたということだ。
「ＭＳ隊は艦に取り付け！強行突破！」

「・・・残機は？」
「ブラック機、カスミ機、レッド機、ブルー機、ヤナセ機です。巡洋艦コヨーテも撃沈しました。」
一応確認をとる。にしても、激しすぎる消耗戦である。残存はヤナセ軍曹以外、皆百戦錬磨の者だけだ。ここまで減るとは予想外である。
「・・・コロニー守備に回る。これ以上の遊撃は無謀だ。」
「了解しました。」
「・・・。」
思うまい。愚かなる人、無常の世。戦にあっては、散るべく命。

「キケロ大尉、先の部隊です。」
「よし。今度こそ逃がすな。」
彼の隊は現在２０機に増殖している。壊滅した各部隊の残兵をまとめ上げ、一大勢力となったのだ。戦場ではこういう男こそ真の戦術家と言える。
「いいか、黒い奴が指揮官だ。１５機で一斉にかかる、奴はトップエースだ。他は牽制にあたれ。」
「・・・手強い。敵は私を狙うか・・・。各機偃月に。」
やられるわけにもいかない。司令なのだ。かといって帰艦すれば防御力が低下し、支えきれるかわからない。
「・・・ヤナセ軍曹、弾薬の補給急げ。漣にいけ。」
何かと便利なのは漣であり、補給速度も他より２０％は早い。
「・・・各機健闘を祈る！ここが我らの死に場所と心得よ！」

激しい弾幕に各機の装甲は削られ、トップエースと言えど既に一兵卒と変わらず、その疲労は極度に達し、弾薬は次第に尽きつ、サーベルの歯はこぼれ、その余命は後幾ばくなるか？鳥海の船体は無数のビームに焼かれ、如月の甲板に数条のミサイルが突き刺さる。諸兵は華と散り、魂のみが安息の場所へ還る。そして、巡洋艦鳥海が沈む。人の血肉を道づれに。
「・・・鳥海救助は後にせよ。」
「きゃぁっ！もう持ちません！」

「下がれっ！」
カスミの悲鳴にヤナセに代わって出撃していたイシガヤが怒鳴る。
「もっ、もうっ！きぁぁぁぁ！！！」
カスミ機が爆砕する。脱出ポッドの離脱は確認できた。
「てめぇらっ！皆殺しだっ！」
逆上したイシガヤの背後でさらに大きい閃光が上がる。
「くっ、如月大破。生存者は離脱します。」
旗艦如月も沈む。
「・・・よもやとは・・・。」
ブラックの旗艦が沈んだのは一年戦争に続いて二度目である。よもやまたこのめでこの光景をみようとは。
「大佐っ！」
巡洋艦漣のクリアが通信で叫ぶ。
「・・・退き時か。しかし退くべきも無し。」
そう、既に退くべき手段がない。敵はまだ多いのだ。例え巡洋艦といえど、漣はエンジンに被弾しＭＳを振り切れる出力は出ない。
「クソッ！こいつらぁ！」
損傷多数のレッドが雄叫びを上げ、一機を撃墜する。しかし、レッドの逃した機体がブラック機に迫る。そして、バズーカを放つ。散る。・・・彼の目前に、蒼き機体が形を崩して、真空に放出されたエアに引火し、火花をあげ、まるでスローモーションの如く、バラバラに、なる。あの機体には、彼の、父が、いた。・・・、今は、いない。その、人の、形を、した、魂の、器は、ひしゃげた、鉄屑に、潰れ、生存のための、真空にもれた空気に、火炎は広がり、人だったものを焼き尽くしていく。きっと、今はワルキューレに導かれ、バルハラに向かうのだ。あぁ、今、彼は死んだ。父は、死んだ！
「ちぃ！レッド中尉、ブラック大佐を漣に撤退させろ！おまえもだっ！」
「なんだとっ！」
「ブラックが役に立たない！いいから下がれっ！おまえも父親が死んだばかりだっ！」
「何かやるのかっ！」
「下がれっ！」
流石のレッドも精神的に疲労が激しく、イシガヤに従う。ブラックはまだ戦えるというが、無理に撤退させる。彼は今、全く冷静ではないのだ。その表情がなお無表情であるとも。
「クリア、漣のコムサイを切り離せ。」
「わかりました。」
それが切り離される。
「会長！しんがりは止めてください！やるなら私が！」
「ライ、戦場では会長というな。また、漣乗員は私の部下であり、社員である。これを守るのは勤め。後ろを向いて逃げるわけにはいかんのだ。」
「しかし！」
「１５秒後、最大速力で逃げよ。ただひたすらに最大速力をだせ。エンジンが壊れるとも。行けっ！」
１５秒後、漣が最大速力をだす。エンジンが悲鳴を上げる。当然敵は追いすがる。が、まばゆくまぶたを焼くが如き大閃光が上がる。視力は当分戻るまい。減光フィルターなど、何の意味もなく、まぶたを閉じたとてさしたる意味もなし。ただ、カメラを切ったイシガヤのみが視力を保つ。

「くそっ！」
あのコムサイには、大量の戦闘サンプルデータや、ＣＰＧ経営上の重要データが積まれていたのだ。他にも試作部品諸々が。その経済価値は計り知れないが、しかし、生き残るにはこれしかなかった。核ではないが、それに優る大閃光をあげる兵器を。
「俺もここまでか・・・」
漣は撤退出来た。が、彼は逃げ切れまい。
「あれは・・・、憎しみの光か。」
その視界いっぱいに暗黒の宇宙を裂くコロニーレーザーの光が映る。味方の屍も敵の屍も巻き込み、なお生きる敵を粒子に変えて。その大量殺戮兵器には、武人の誇りが、ない。暗黒の深淵を埋める光は、人を宇宙の粒子に還るだけのおぞましい殺戮兵器なのだ。
・・・そして、戦闘は終わった。